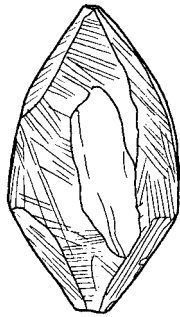


長岡京跡右京第748次 発掘調査報告



2 0 0 3

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京跡右京第748次 発掘調査報告

2003

財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序 文

長岡京市は京都盆地の表玄関に位置し、東に河川が流れ、西に山々が連なるという地の利に恵まれており、今も昔も人が生活するのに適した環境にあります。

当地にはかつて「長岡京」という都がおかれ、王城の地として栄えたのを含め、様々な時代の文化が刻まれています。

本書で報告しますのはJR長岡京駅の東口を南北に通る市道0207号線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査成果です。

周辺には長岡京を始め、永井氏勝龍寺城跡、神足遺跡といった遺跡が重複して所在し、これまで数多くの調査が実施されております。

今回の調査でも、永井氏勝龍寺城跡や神足遺跡などに関する新たな発見がなされており、たとえ道路の拡幅という細長いトレンチ調査でも十分に成果を導き出せることが実証されております。

これらの調査成果を有効に活用し、さらに周辺での成果と合わせ、長岡京跡をはじめとする市街地内の遺跡の解明に努力しているところです。

最後になりましたが、調査の実施・整理にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後もなお一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

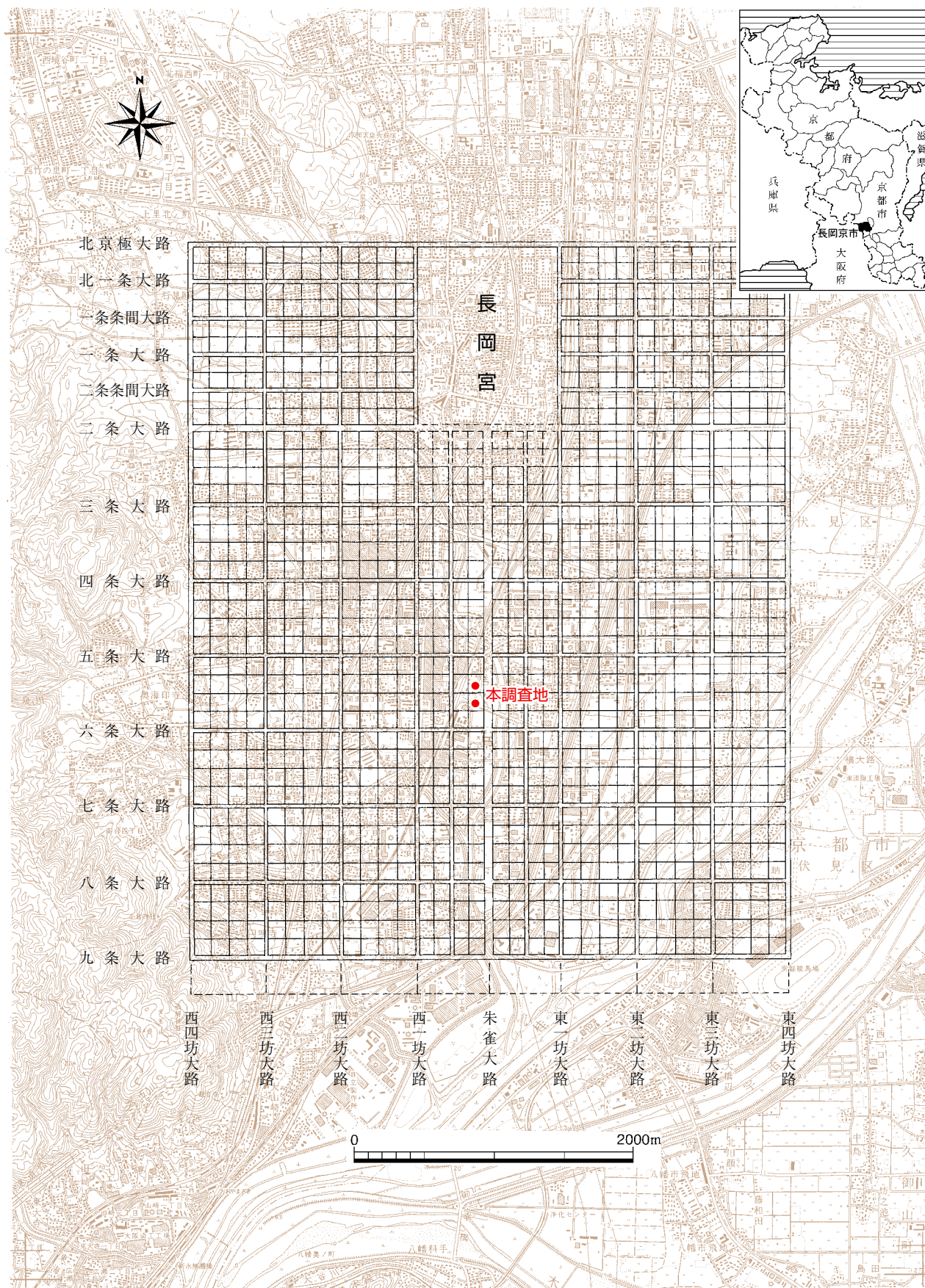
財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長 芦田 富男

凡 例

- 1．本書は、財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが長岡京市東神足一丁目地内で行った長岡京跡右京六条一坊二・三町、神足遺跡、近世勝龍寺城跡に関する発掘調査の概要報告である。
- 2．発掘調査は、長岡京跡右京第748次調査として、北調査区（7ANMSL 7地区）を2002年10月1日から10月23日まで岩崎誠が、南調査区（7ANMWY 8地区）を2002年11月25日から2003年1月17日まで山本輝雄がそれぞれ担当した。調査面積は、北調査区が138㎡、南調査区が153㎡の計291㎡であった。
- 3．長岡京跡の調査次数は、宮域、右京域、左京域にそれぞれ分けて調査件数を通算したものであり、本調査は右京域での第748回目にあたる。調査地区名は、基本的に前半が奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
- 4．長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
- 5．本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集（1985年）に従って略記した。
- 6．長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数＋番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。
- 7．遺物写真は、杉本和樹氏（西大寺フォト）に撮影を依頼した。
- 8．本書の執筆は、北調査区に関する内容を岩崎が、南調査区を山本がそれぞれ担当し、まとめと編集はこの両名で行った。

表紙カット 竪穴住居S H52出土の磨製石鏃



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40,000)

本文目次

序文	i
凡例	ii
1 はじめに	1
2 調査経過	2
3 検出遺構	3
(1) 北調査区の遺構	3
基本層序	3
近世の遺構	3
平安時代の遺構	5
弥生時代の遺構	5
その他の遺構	7
(2) 南調査区の遺構	8
基本層序	8
近・現代の遺構	8
平安時代の遺構	10
長岡京期の遺構	10
弥生時代の遺構	12
4 出土遺物	16
(1) 北調査区の遺物	16
近世の遺物	16
平安時代の遺物	16
長岡京期の遺物	17
弥生時代の遺物	17
(2) 南調査区の遺物	17
平安時代の遺物	17
長岡京期の遺物	18
弥生時代の遺物	20
5 まとめ	25
(1) 近世勝龍寺城跡	25
(2) 長岡京期	26
(3) 弥生時代の神足遺跡	27

図 版 目 次

- 図版 1 北調査区江戸時代の遺構全景（南から）
- 図版 2 北調査区下層遺構全景（南から）
- 図版 3 堀 S D01 全景（北から）
- 図版 4 (1) 北調査区江戸時代の遺構全景（南から）
(2) 堀 S D01 屈曲部畦断面（南東から）
- 図版 5 (1) 堀 S D01 中央畦断面（南から）
(2) 堀 S D01 北畦断面（南から）
- 図版 6 (1) 南調査区全景（北から）
(2) 南調査区全景（南から）
- 図版 7 (1) 竪穴住居 S H47・S H52（東から）
(2) 竪穴住居 S H46・柱穴群（南東から）
- 図版 8 (1) 竪穴住居 S H47（北から）
(2) 竪穴住居 S H46（南東から）
- 図版 9 (1) 炉跡 S X50（北から）
(2) 炉跡 S X51（南東から）
(3) 環濠 S D39（南西から）
- 図版 10 (1) 土坑 S X41（南西から）
(2) カマド S X42（南から）
(3) カマド S X42 の断面（北から）
- 図版 11 (1) 堀 S D01 出土飛雲文軒平瓦
(2) 柱穴 P 19 出土粘板岩剝片
(3) 北調査区出土土器類
- 図版 12 南調査区出土平安・長岡京期の遺物
- 図版 13 南調査区出土弥生土器
- 図版 14 南調査区出土石器

挿 図 目 次

第1図	長岡京と調査地の位置 (1/40,000)	iii
第2図	発掘調査地位置図 (1/5,000)	1
第3図	北調査区平安時代以降の遺構・土層図 (1/100)	4
第4図	堀 S D01土層図 (1/40)	5
第5図	北調査区弥生時代の検出遺構図 (1/100)	6
第6図	溝 S D02・21実測図 (1/40)	7
第7図	南調査区土層図 (1/80)	8
第8図	南調査区検出遺構図 (1/100)	9
第9図	カマド S X42実測図 (1/20)	10
第10図	土坑 S K41・49実測図 (1/40)	11
第11図	竪穴住居 S H46実測図 (1/50)	12
第12図	竪穴住居 S H47実測図 (1/50)	12
第13図	竪穴住居 S H48実測図 (1/50)	13
第14図	竪穴住居 S H52実測図 (1/50)	13
第15図	炉跡 S X50・51実測図 (1/20)	14
第16図	環濠 S D39実測図 (1/40)	15
第17図	北調査区出土遺物実測図 (1/4)	16
第18図	南調査区出土平安時代の遺物実測図 (1/4)	17
第19図	土坑 S K41・49出土遺物実測図 (1/4)	18
第20図	南調査区包含層、柱穴出土遺物実測図 (1/4)	20
第21図	南調査区出土弥生土器実測図 (1/4)	21
第22図	南調査区出土石器実測図 - 1 (1/2)	23
第23図	南調査区出土石器実測図 - 2 (1/2)	24
第24図	「永井直清公御在所城州神足之図」と近世遺構配置図 (1/2,000)	28
第25図	長岡京の条坊と遺構配置図 (1/2,000)	30
第26図	神足遺跡の弥生時代遺構配置図 (1/5,000)	31

付 表 目 次

付表 1 「永井直清公御在所城州神足之図」推定範囲内の遺構検出状況.....	29
付表 2 報告書抄録.....	32

2 調査経過

左京第223次⁽¹⁰⁾など数多くの発掘調査が実施され、長岡京期はもとより、弥生時代から近世に至るまでの遺構、遺物が数多く確認されていた。特に、北調査区の西に隣接する右京第401次調査では、近世勝龍寺城の屋敷地、古墳時代の土墳墓群、弥生時代の方形周溝墓群などが、また東に隣接する右京第61次調査では中・近世や弥生後期から古墳初頭の遺構が確認されている。一方、南調査区の南西に隣接する右京第279次調査では、近世勝龍寺城の本丸内施設や弥生中期を中心とした竪穴住居跡群などが確認されており、こうした周辺での調査状況を考慮すると、今回の調査においても同様の成果を得られることが十分に予測された。

2 調査経過

今回の調査区は、先にも述べたように南北2箇所大きく離れており、当初は両者を併行して進める予定であった。ところが、南調査区の予定地にある桜並木の撤去作業が調査の着手日までに間に合わなかったことから、まず北調査区から始めることになった。

北調査区の調査では、対象地に東西幅3m、南北長46mの調査範囲を設定した。近年の土地利用の変遷や、当調査区の西で実施した右京第401次調査成果を基に、10月1日から地表面の駐車場整地盛土から近世包含層までを重機で除去し、以下を人手による詳細な調査対象とした。しかし、重機掘削段階で、調査区の東辺に沿って、東辺から約1m西で、シートパイルによる土留め壁を検出した。この土留め壁は、一部撤去されていたが、大部分の範囲にシートパイルそのものが残っていた。また、円形給槽、給槽所施設などのコンクリート基礎がそのまま埋め立てられている箇所や、給槽所解体時の掘削攪乱抗などもあった。このため、遺構の検出作業が計画通りに実施できたのは、調査区南端の3m区間だけで、調査区北端から南へ約35mまでの間は、幅約2mしかなかった。それでも、近世から弥生時代に至るまでの遺構を確認することができ、10月22日から埋め戻しに着手し、それが終了したのは10月23日であった。

一方、南調査区の調査は、遅れていた桜並木の撤去が終了した11月25日から開始することになり、東西幅約3m、南北長約50mの狭長な調査区を設定し、重機による掘削に着手した。そして、11月28日から作業員を動員して壁面の調整や遺構検出のための平面精査を進めたところ、遺構検出面は地表から浅く、しかも桜の根株跡やそれを除去する際につけられた重機の爪痕などによって攪乱を受けていた箇所が少なからず認められた。それでも、弥生時代中期の竪穴住居を中心に長岡京期の土坑や平安時代のカマドなどの遺構を相次いで検出することができ、遺構の密度が極めて高いことを知ることができた。遺構の掘り下げがほぼ終了した12月25日に全景写真を撮影し、年末、年始の休暇により調査を一旦休止した。翌2003年の1月7日から調査を再開し、8日から断面の実測、14日からは平面の実測作業を行った。そして、発掘用資材などの撤収やグラウンドへの進入路の埋め戻しなどを行い、17日には現地での作業をすべて終了することができた。

なお、遺物の取り上げなどに際しては、南北方向に5m間隔で地区割を行い、南から順に1区から10区までの名称を与えた。

3 検出遺構

(1) 北調査区の遺構

基本層序

当調査区の土層堆積は、基本的に4層からなる(第3図)。第一層は、現在の地位表面を構成する駐車場整地盛土と、給槽所設置時の造成盛土から解体時の掘削攪乱土までの層である(同図第1層)。第二層は、竹藪や畑作時の客土または耕作土と考えられるもので、厚さ0.15~0.2mの3層からなる砂質土堆積である(同図第2~4層)。第三層は、畑の耕作土と考えられるもので、第二層に類似する砂質土を基調に、下にある堆積土の細かい攪拌混入が見られる堆積層である(同図第8・10層)。第四層は、段丘を構成する堆積と考えられるもので、黄色系シルトまたは礫層である。当調査区では、第四層が遺構検出面になっていた。遺構検出面標高は、北調査区北端で21.2m、南端で20.6mで、北から南に緩やかに傾斜していた。以下、新しい遺構から報告する。

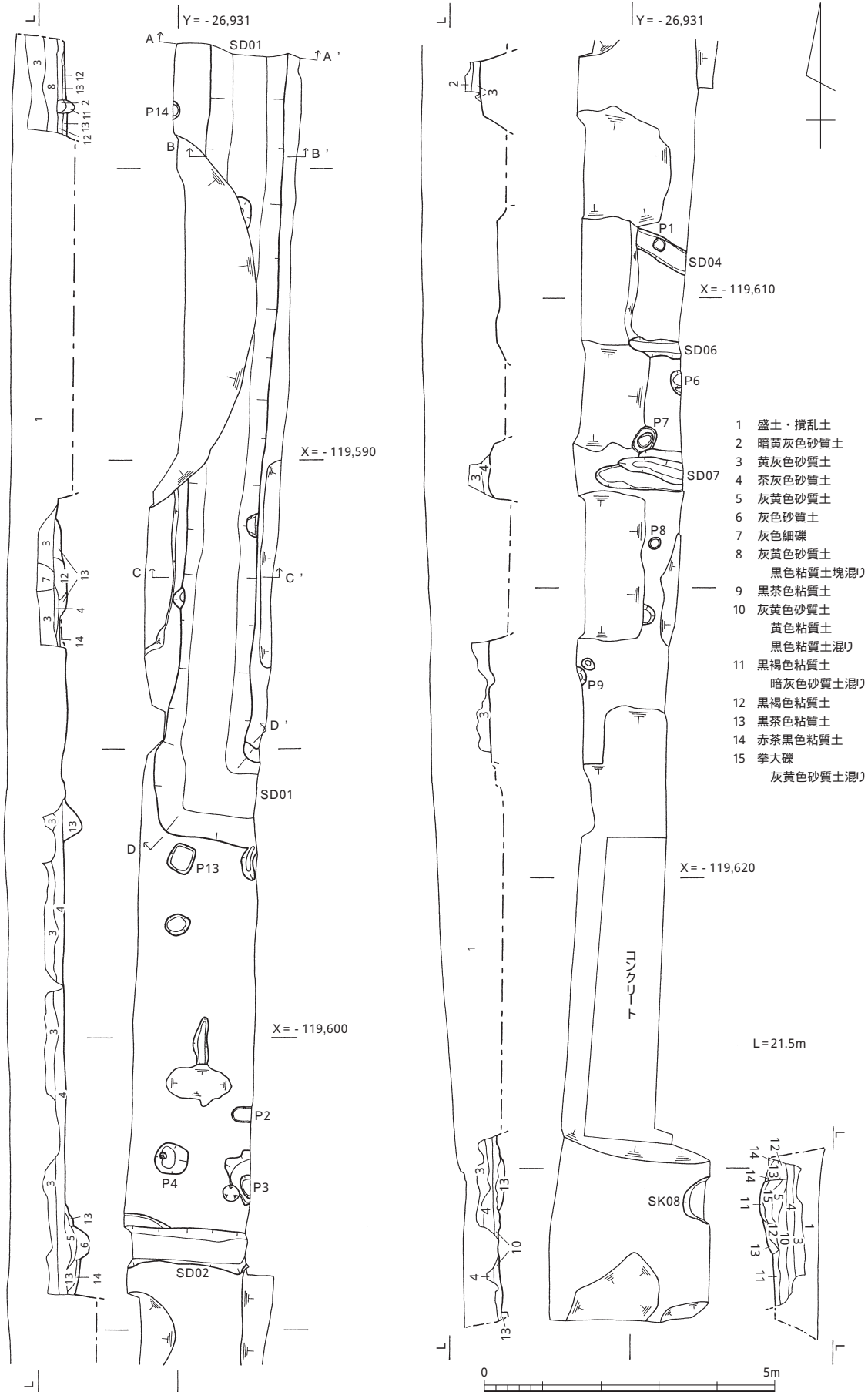
近世の遺構(第3図、図版1・3~5)

近世の遺構には、堀S D01と溝S D02・03・06・07、土坑S K08、柱穴状遺構などがある。また、当調査区の東で実施された右京第61次調査などの周辺部調査検出遺構に、当調査検出遺構と密接な関係にあると思われるものがあるので、これについても触れておく。

堀S D01 幅約1.5m、深さ約0.5~0.8mの規模で、底は幅約0.6mの平坦面をなす(第3・4図、図版3~5)。断面逆台形の整った形状に掘られたものである。北で東に約5度の振れ角をもって直線的に南北に掘られており、南端では直角に東に折れ曲がる。屈曲部の中心座標はX = -119.595.76m、Y = -26.930.53mである。堀底は、検出範囲北端の標高が約20.5m、南端屈曲部は約20.4mで、南に向かって僅かに傾斜している。埋土は基本的に上下2層からなるが、下層は北端で無くなり、上層は場所によって異なる。屈曲部の東延長上には、右京第61次調査で検出された東西方向の溝S D6101がある⁽¹¹⁾。この溝は、西で北に約5度の振れ角で直線的に掘られていること、溝幅約1.25~1.4m、深さ約0.4mの規模で、溝底幅約0.6mの断面逆台形であること、溝底標高が検出範囲西端で19.75m、東端で19.84mで、東に向かって僅かに傾斜していることなどから、今回検出したS D01南端の屈曲部から繋がると考えてよさそうである。また、溝の形態が、茶屋口推定地の右京第630次調査で検出した堀S D29にきわめて近いことから、「永井直清公御在所城州神足之図」に示された外堀の可能性⁽¹²⁾がある。堀S D29の最も残りの良いところで、幅約2m、深さ約0.85mあり、それでもある程度の削平が予測できることから、今回検出した堀S D01が外堀だとすると、約0.3m以上の削平を受けていると予測できる。

溝S D02 堀S D01の屈曲部以東の東西方向と並行して、西で北に約5度の方向に直線的に掘られた、幅約0.6m、深さ0.3mの溝である(第6図)。堀S D01の南端肩から溝S D02の北肩までの距離は約6.5mを測る。右京第61次調査では、溝S D6101の南肩から約7m南に、幅0.8m、深さ0.2mの東西方向溝S D6104が検出されている。この溝は、西で北に約5度振れており、検出位置や規模・形態の特徴などから、今回検出した溝S D02と繋がる可能性がある。また、今回

4 検出遺構



第3図 北調査区平安時代以降の遺構・土層図 (1/100)

検出した溝 S D02は、当調査区の西約 7 m 付近で北に折れ曲がり、右京第524次調査東辺部検出の南北溝 S D07にも繋がる可能性がある⁽¹³⁾。このように考えると、当調査検出溝 S D02、右京第61次調査検出溝 S D6104、右京第524次調査検出の溝 S D07のそれぞれが、外堀の内側に築かれた土塁裾の排水溝と考えることができる。

溝 S D06 幅約0.3m、深さ約0.2mの東西溝である。西で北に約5度振れている。

溝 S D07 幅約0.4m、深さ約0.2mの東西溝の西端部で、北辺が深くなっている。

土坑 S K08 調査区南端近くの東辺で、円形掘形と思われる土坑 S K18を検出した。直径約0.75m、深さ約0.4mを測る。壁面は、ほぼ垂直に掘削されている。埋土は3層からなり、中層には拳大の礫が集積し、隙間には黄色系の砂質土が詰まっていた。当遺構は、当調査区から西約20mの右京第401次調査で検出した「永井直清公御在所城州神足之図」に図示された「御旗指八人」の建物群に付随する土坑群の一つである可能性がある。

柱穴群 柱穴には、P2～P4、P6・P7・P12・P14などがある。このうちP6は、右京第401次調査で検出した柵 S A50の東延長上にあり、一連の柱列群の一つである可能性がある。

平安時代の遺構（第3図）

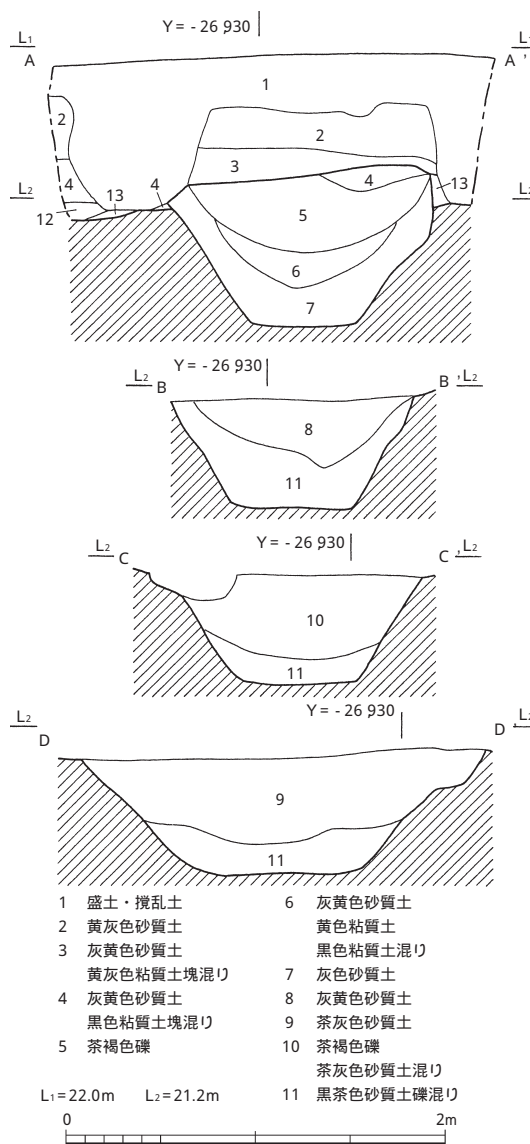
平安時代の遺構には、P1・P8・P9などの柱穴群がある。いずれも黒色系の粘質土を埋土とする。直径が約0.2m前後の円形掘形で、深さは約0.1～0.2m前後である。時期を確定する遺物の出土はなく、不安を残すが、右京第401次調査検出の平安時代掘立柱建物群の柱穴に類似する特徴をもつことから、平安時代の所産とした。

弥生時代の遺構（図版2）

弥生時代の遺構には、溝や落ち込みなどがある。

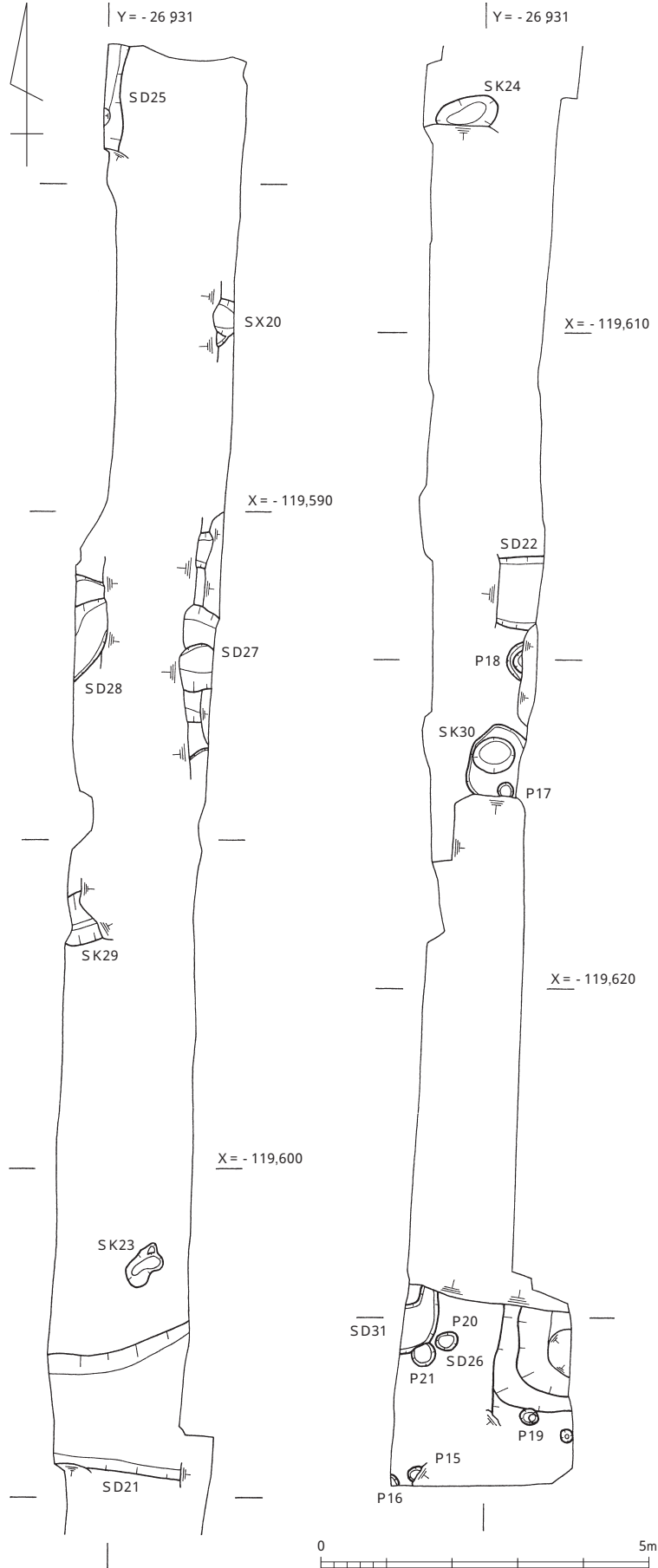
溝 S D25 南北方向の溝の東辺肩部を検出した。遺物が少なく、時期の確定ができない。しかし、少量の細片になった土器片から、弥生時代中期の所産と思われ、方形周溝墓の一部と考えられる。

落ち込み S X20 直径約0.6m、深さ約0.3mの柱穴状落ち込みである。西は堀 S D01に、東は



第4図 堀 S D01土層図 (1/40)

6 検出遺構



第5図 北調査区弥生時代の検出遺構図 (1/100)

シートパイルで削られ、正確な形状はわからなかった。

溝 S D27・28 北西 - 南東方向の、本来一条の溝と考えられるもので、近世の堀 S D01により寸断している。幅約 2 m、深さ約 0.3 m の規模である。出土遺物はほとんど無く、時期が決められないが、黒色系の粘質土を埋土としていることや、細片となった土器片の胎土から、弥生時代中期と考えられる。

土坑 S K29 深さ約 0.4 m の深い掘り込みで、北東部は堀 S D01 の削平を受けている。北東 - 南西方向に長い楕円形または長方形掘形になるものと思われる。長辺約 0.6 m、短辺約 0.4 m、深さ約 0.1 m を測る。

土坑 S K23 北東 - 南西方向に長い長方形に近い掘形で、長辺約 0.6 m、短辺 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。

溝 S D21 幅約 1.8 m、深さ約 0.25 m で、東西方向に掘られている（第 6 図）。検出部東端近くで、北に曲がる様相が見て取れる。方形周溝墓の一部と考えられる。約 10 m 北で検出した溝 S D27・28 を北辺溝とする方形周溝墓の可能性はある。そうだとすると、土坑 S K29 が主体部になる可能性がある。

土坑 S K24 北東 - 南西方向に長い長方形に近い楕円形掘形で、長辺約 1 m、短辺約 0.6 m、深さ約 0.3 m を測る。

溝 S D22 幅約 1 m、深さ約 0.1 m の東西方向溝である。残存状況が良くないが、方形周溝墓の一部と考えられる。北約 8 m の位置で検出した溝 S D21 を、北辺溝として共有する方形周溝墓の可能性はある。そうだとすれば、土坑 S K24 が主体部の可能性がある。

土坑 S K30 北東 - 南西方向に長い長方形掘形をもつもので、長辺約 1.2 m、短辺約 0.8 m 前後であろうか。深さ 0.1 m で、北西辺に接して直径 0.7 m、深さ約 0.1 m の円形に窪む部分がある。

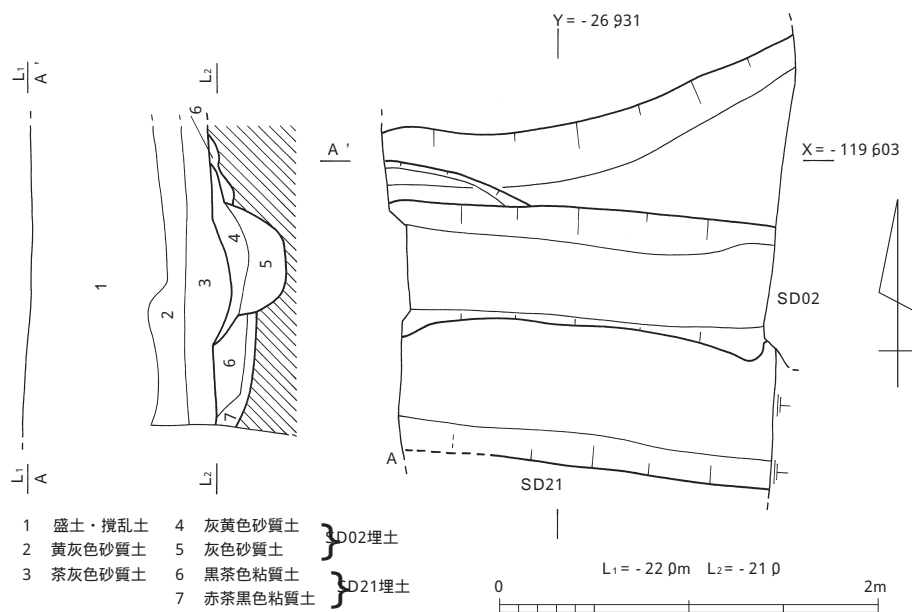
溝 S D26 ほぼ直角に屈曲する肩を持つ落ち込みである。幅約 1 m 以上の屈曲する溝と考えられる。方形周溝墓

の南西隅と考えられる。

溝 S D31 幅約 0.7 m の東西方向溝が、幅約 0.3 m に狭まって北に屈曲する。方形周溝墓の南東隅と考えられる。

その他の遺構

柱穴群の中には、



第 6 図 溝 S D02・21 実測図 (1/40)

8 検出遺構

当期のものもあると考えられる。

(2) 南調査区の遺構

基本層序

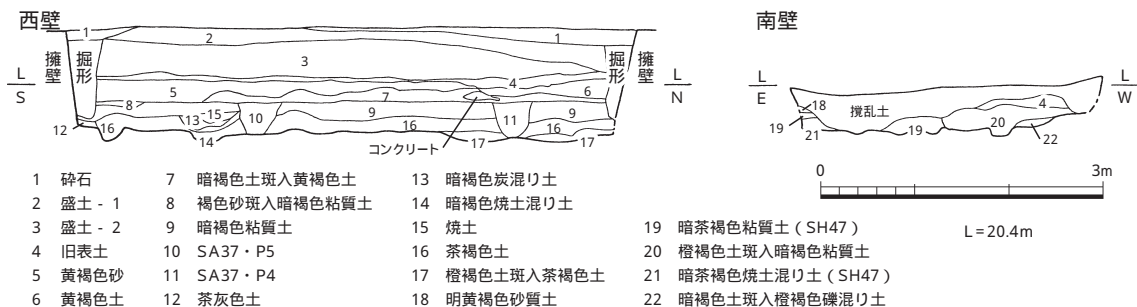
南調査区は南北に細長く、しかも地表面はグラウンドへの進入路などで起伏があったため、層序は各所で異なっていた。まず、比較的遺存状態が良好であった北部の進入路付近(8~9区)では、上から盛土、旧表土など第1~8層までが近現代の堆積層であり、そのうち黄褐色砂(第5層)は近現代の遺構埋土や調査区の中央部付近でも認めることができた。その下には厚さ約0.2mほどの暗褐色粘質土(第9層)、厚さ約0.2mほどの茶褐色土(第16層)、橙褐色土斑入茶褐色土(第17層)が堆積し、橙褐色系の粘質土および砂礫である地山面に至っていた。第9層は、この部分以外には認められず、部分的に炭や焼土塊、黄白色の粘土塊を含み、長岡京期の遺物を包含していることから、整地層である可能性が考えられる。また、第16層は弥生時代の堆積土であり、弥生時代の遺構はこれと類似する土層であった。一方、調査区の南端部では、桜の根株の除去に伴う攪乱土や旧表土(第4層)、暗茶褐色砂質土(第18層)などがわずかに堆積するのみで、地表下0.2~0.4mほどで地山面に達していた。このような地表から地山面までの深度が浅い状況は、調査区の10区や7区以南で認められ、また桜の根株の除去に伴う攪乱坑なども各所でみられた。

地山面の標高は、調査区の北端で20.2m前後、南端で20.1m前後を測り、おおむね平坦であるといえる。遺構の大半は、地山面上において検出したが、遺構の遺存状態などを考慮すると、その上面は後世に大きく削平を受けているものと考えることができよう。検出した遺構は、近・現代、平安時代、長岡京期、弥生時代のものに大別でき、近世勝龍寺城跡に関するものは、調査終了後の立会調査で本丸を囲む内堀の輪郭を確認した。以下、時代の新しいものから順に説明する。

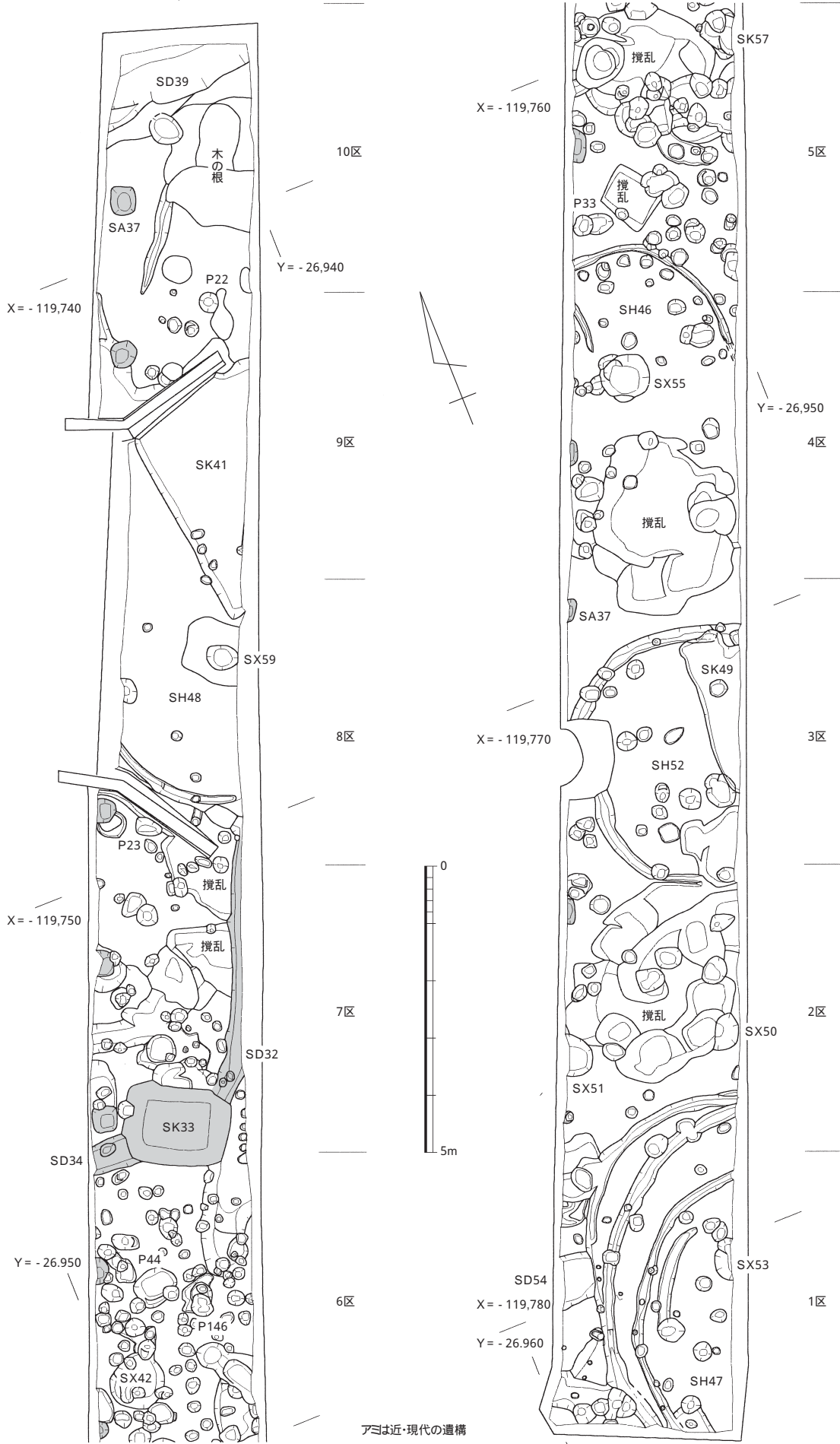
近・現代の遺構

近現代の遺構には、柵列1条、土坑1基、溝2条などがある。

柵列 S A 37 調査区の西辺に沿って検出した南北方向に延びる柱列で、南北に14間分を確認した。柱掘形は、一辺約0.5mほどの隅円長方形で、深さは0.4m前後あり、柱間寸法は2.7m等間であった、現在の敷地を区切るフェンスと同じ方向であることから、フェンスに改築される以前の塀になるものと考えられる。



第7図 南調査区土層図(1/80)



第8図 南調査区検出遺構図 (1/100)

土坑 S K 33 7区のほぼ中央部で確認した隅円方形の土坑で、長さ約1.9m、幅約1.4m、深さは0.7~0.8mほどの規模がある。埋土は上下2層に分けられ、上層は厚さ約0.65mほどの小石を混りの黄褐色砂、下層は硬質の暗茶灰色礫混り土である。上層からは、土師器、須恵器、陶磁器の細片が少量出土したほか、底部に接するような状態で土管が出土している。

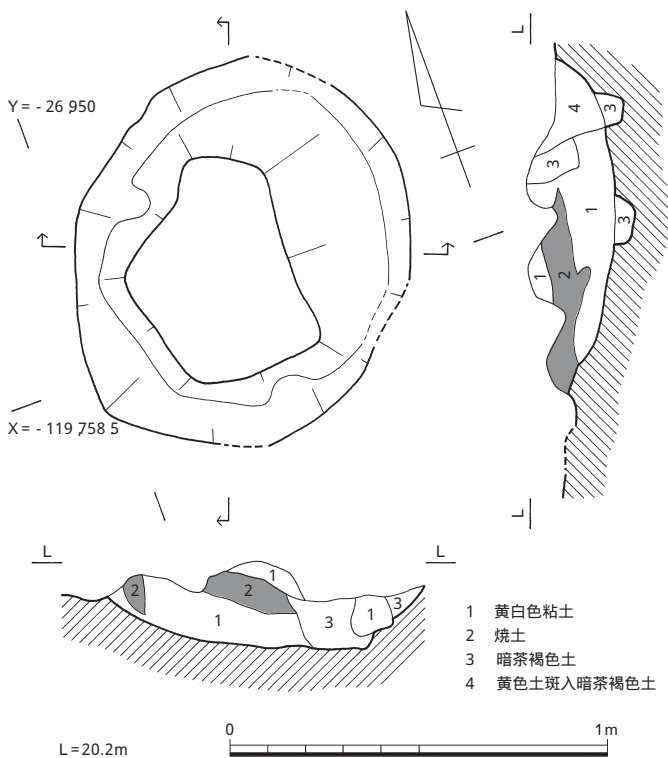
溝 S D 32 土坑 S K 33の北東隅から北東方向に延びる素掘り溝で、幅約0.4m、深さ約0.25mほどの規模があり、断面はU字形に掘られていた。埋土は、土坑 S K 33の上層と同じ黄褐色砂1層で、須恵器と陶磁器の細片が少量出土したのみである。埋土の様相から、土坑 S K 33と同時期のもと考えられる。

溝 S D 34 土坑 S K 33と重複関係にある北東から南西方向に延びる素掘り溝で、それよりも古いことが明らかになった。幅約0.6m、深さ約0.1mほどの規模があり、埋土は黄灰色砂1層のみで、遺物は何も出土しなかったが、埋土の様相からこの時期に比定した。

平安時代の遺構

この時期の遺構には、カマド1基と柱穴P33などがある。

カマド S X 42 (第9図、図版10) 6区の南西部で検出した遺構であるが、重機の爪痕や木の



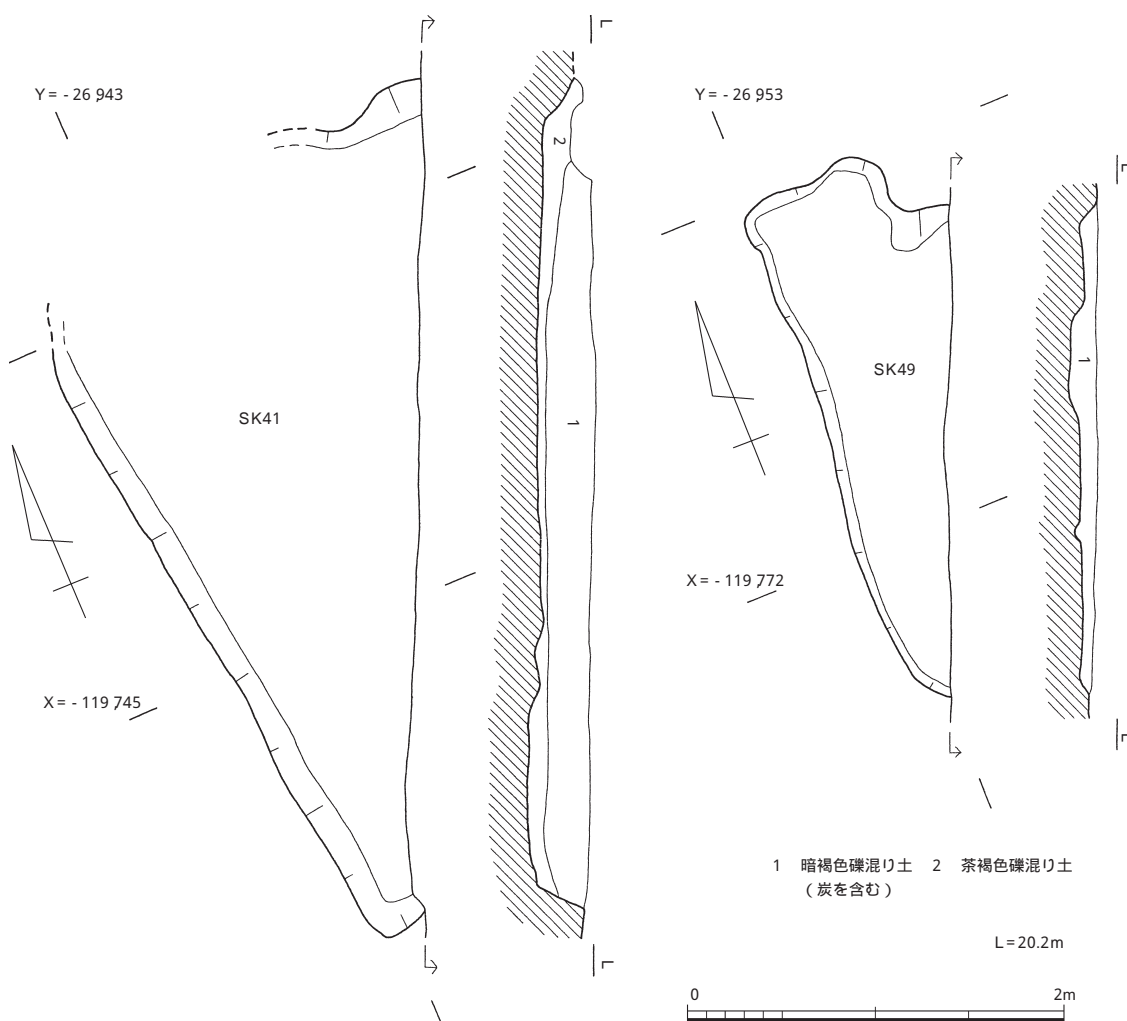
根などによって部分的に破壊されていた。東西約0.9m、南北約1m、深さ約0.1mほどの楕円形を呈した土坑内に黄白色粘土を土饅頭のように盛り上げて構築している。焼き口の位置は明確にできなかったが、上面から層をなすように赤く変色した個所がみられ、熱を受けたことを示していることから、カマドではないかと判断した。黄白色粘土内には遺物を全く含んでいなかったが、暗茶褐色土からは黒色土器B類の椀や土師器の小皿、須恵器片など平安時代中期の遺物が少量出土している。

こうしたカマドは、長岡京期にまで時代は溯るが当調査区の南西約250mで行われた右京第630次調査において

第9図 カマド S X 42実測図 (1/20)

数例確認されているものの、類例が乏しいことだけは確実であり、その意味で注目に値する遺構といえよう。

柱穴 P 33 5区の南西部で検出した長楕円形の遺構で、長軸0.7m、短軸0.35m、深さ0.2mほどあり、土師器、黒色土器などが少量出土している。



第10図 土坑 S K 41・49実測図 (1/40)

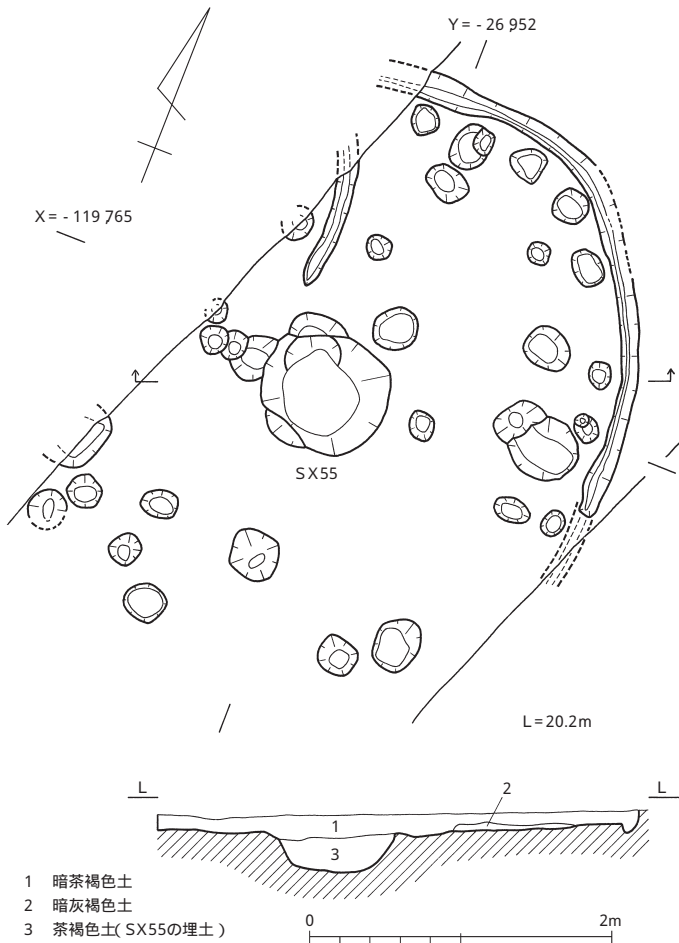
長岡京期の遺構

この時期の遺構は、土坑 2 基と柱穴 P 23・44 などがある。

土坑 S K 41 (第10図、図版10) 8～9区にかけて検出した方形の土坑で、長岡京期の整地層と考えられる暗褐色粘質土の上面から掘り込まれていた。土坑の大半が調査区域外の東側にあるため、全容は不明であるが、東西2.5m以上、南北約3.9mほどに復元でき、深さは約0.3mほどの規模がある。直線的な土坑西辺の方位は、国土座標の北で西に約9°ほど振れており、正方位を向いていない。埋土は、炭を含む暗褐色礫混り土と茶褐色礫混り土の上下2層に大別され、上層からは土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦など長岡京期の遺物がまとまって出土した他、弥生土器や石器など弥生時代の遺物も混在した状態で出土している。

土坑 S K 49 (第10図) 3区の東辺中央部で確認した不整形な土坑で、竪穴住居 S H 52の上面に掘り窪められていたものである。東部が調査区域外にあるため、全容は不詳であるが、東西1m以上、南北2.8m以上、深さ約0.15mほどの規模に復元できる。土坑の西辺は直線的で、その方位はおおむね国土座標の北に一致している。埋土は、暗褐色礫混り土1層のみで、土師器、須恵器、ミニチュア土製品などの遺物が出土している。

12 検出遺構



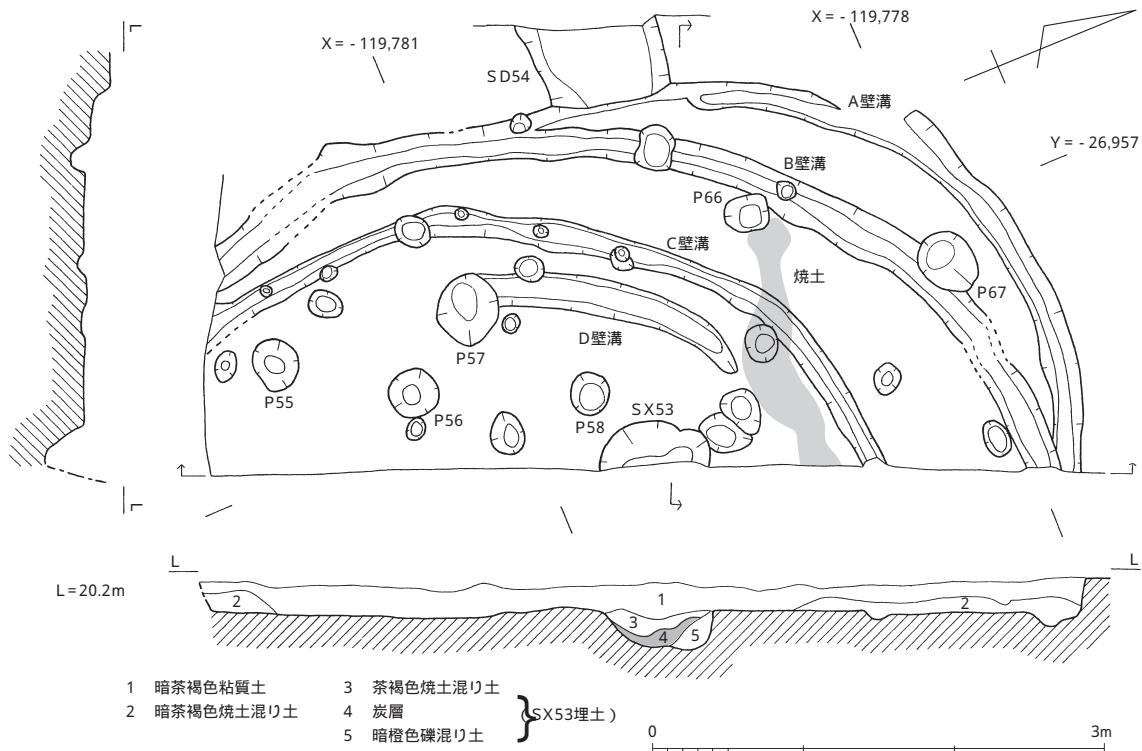
第11図 竪穴住居 S H46実測図 (1/50)

柱穴 P23・44 P23は8区の南西部で検出した楕円形の遺構で、北部は進入路の擁壁によって破壊されていた。長軸0.45m、短軸0.3m、深さ0.1mほどの規模があり、須恵器杯Aが出土している。P44は6区の中央部で検出した隅円方形の遺構で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.35mほどある。須恵器と弥生土器片が少量出土しているが、形態や方位などからこの時期に比定した。

弥生時代の遺構

この時代の遺構には、竪穴住居4棟、炉跡2基、環濠1条、溝2条、土坑1基、それに数多くの柱穴があり、検出した遺構の中ではこの時代のものが最も多かった。

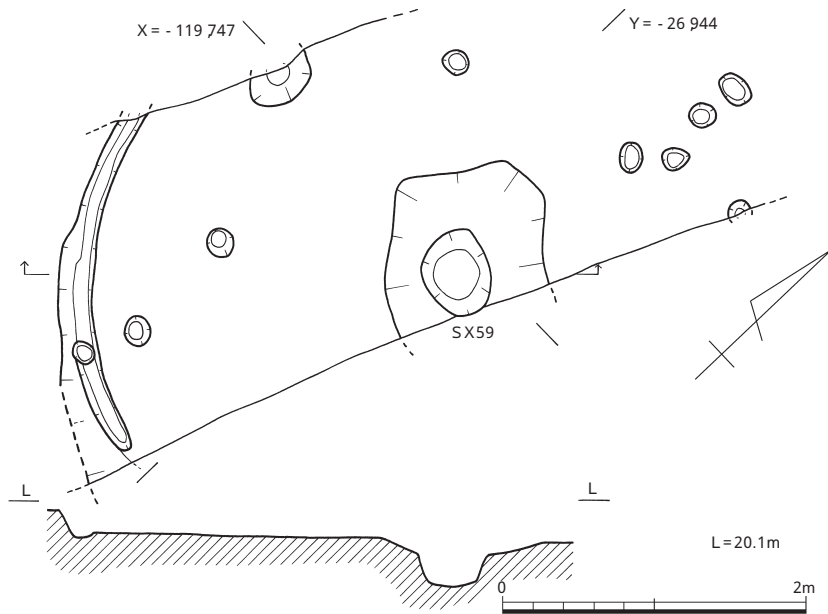
竪穴住居 S H46 (第11図、図版8) 4～5区にかけて検出した円



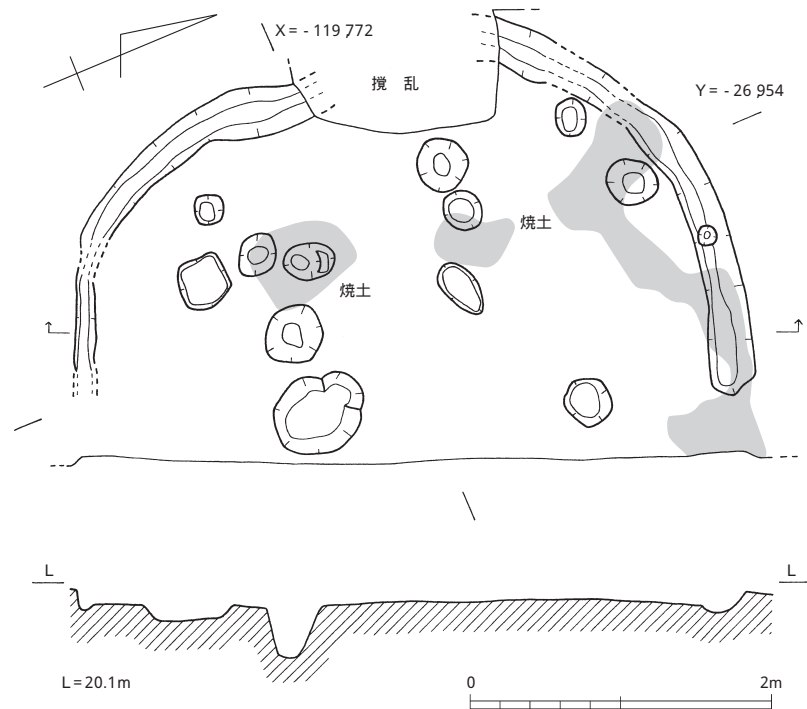
第12図 竪穴住居 S H47実測図 (1/50)

形の住居跡で、南部は根株跡によって大きく破壊されていた。径約4mほどの規模に復元され、現状での深さは0.1~0.15mある。この住居の壁溝は、他の住居に比べて幅の狭いのが特徴で、幅約0.1m、深さ約0.05mほどであった。壁溝のすぐ内側には、径0.1~0.25mほどの楕円形を呈した柱穴状の遺構がほぼ等間隔で並ぶが、いずれも浅く、その性格については不明である。住居内の埋土は、暗茶褐色土と暗灰褐色土の2層に分けられ、弥生土器の破片が出土している。住居の中央部には、炉跡と考えられるS X55がある。S X55は、径約0.8mほどの楕円形を呈し、深さは約0.25mの規模があるが、内部に茶褐色土が1層堆積するのみで、焼土や炭などは認められなかった。

竪穴住居S H47(第12図、図版8)1~2区にかけて検出した円形の住居跡である。4重に巡る壁溝を確認したことから、同じ場所で少なくとも4回ほどの建て替え行っているのではないかと考えられる。壁溝は、それぞれ幅0.15~0.3m、深さ0.05~0.1m前後の規模があり、外側からA壁溝、B壁溝、C壁溝、D壁溝と命名したが、B壁溝で径約7.2m、C壁溝では径約6mほどの住居規模に復元することができる。A壁溝とB壁溝は南西部で重複し、C壁溝内では柱穴状の遺構を4個ほど確認している。住居内からは、数多くの柱穴を確認でき、P55~P58、P66、P67など深さが0.3m前後ある深いものについては主柱穴になる可能性が高いと考え



第13図 竪穴住居S H48実測図(1/50)



第14図 竪穴住居S H52実測図(1/50)

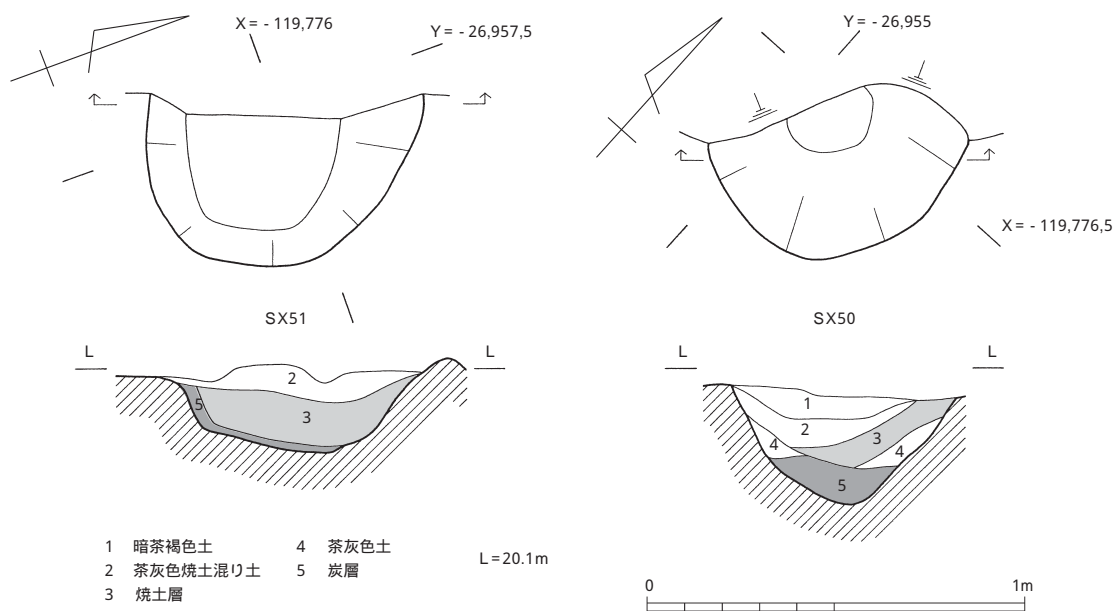
られる。この住居に伴う炉跡S X53は、径約0.7mほどの楕円形で、深さが約0.25mあり、内部には焼土や炭の堆積が認められた。住居内からは、弥生土器の他、打製石鏃、大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧などの石器が出土し、また焼土塊や炭化材などの堆積が認められたことから、焼失住居である可能性が濃厚と考えられる。

竪穴住居S H48（第13図） 8区で検出した円形の住居跡である。壁溝の一部しか確認していないので全容は不明であるが、径約5mほどの規模に復元することができ、現状での深さは約0.2mである。壁溝は幅0.15m、深さ0.05mほどあり、住居のほぼ中央には炉跡の可能性のあるS X59がある。S X59は、径0.45~0.55mほどの楕円形で、深さは約0.3mあるが内部には焼土や炭などの堆積は認められなかった。住居内には、少数の柱穴があるが、主柱穴と考えられる深いものはなかった。

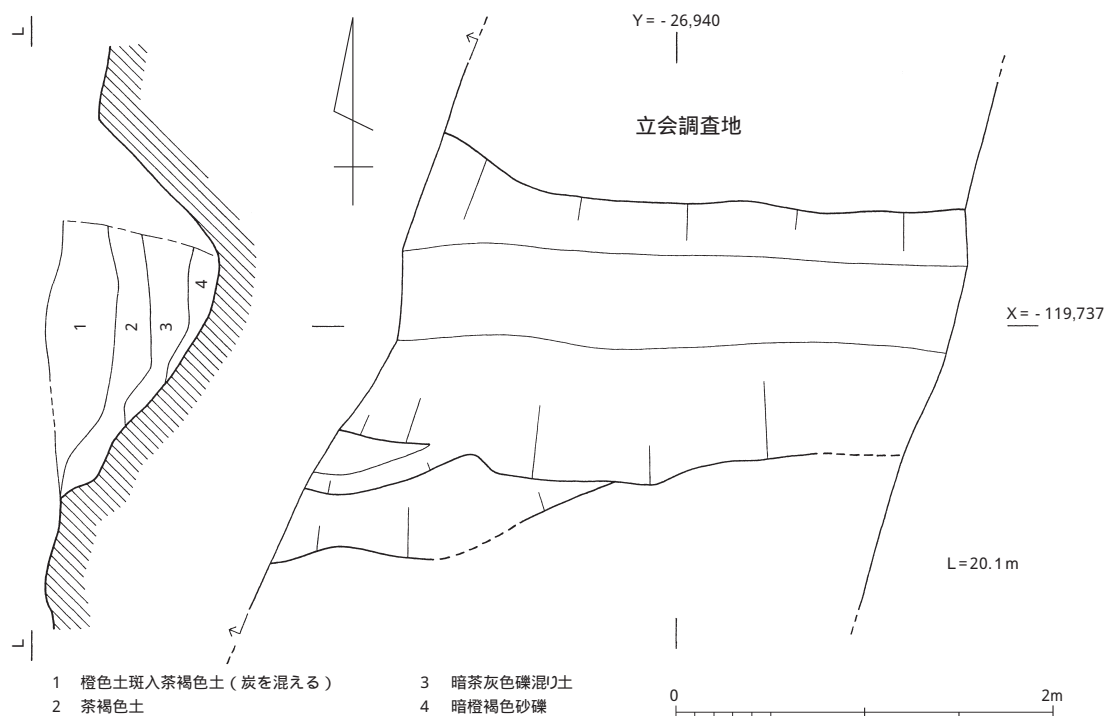
竪穴住居S H52（第14図） 3区において検出した円形の住居跡である。壁溝は、西部の一部を攪乱坑で破壊されていたが、幅約0.25m、深さ約0.1mほどで、径約4.75m前後の住居規模に復元することができる。住居内からは、弥生中期の土器や磨製石鏃などが出土しているほか、焼土塊の堆積が広範囲に認められたことから、S H52の場合と同様に焼失住居と考えられる。ただし、この住居に伴う炉跡は確認することができず、主柱穴も明確ではなかった。

炉跡S X50（第15図、図版9） 2区の東辺中央部で確認した楕円形の土坑で、内部に焼土層や炭化層が堆積していたことから、炉跡と判断した。北西半部は根株跡によって破壊されていたが、径約0.7m、深さ約0.3mほどの大きさに復元でき、掘り鉢状に掘り窪められていた。内部からは、弥生土器の破片が少量出土したのみで、詳しい時期などは分からない。この炉跡は、竪穴住居の中央部に設けられたものと考えられるが、壁溝などが削平されている可能性が濃厚で、詳細は不明といわざるをえない。

炉跡S X51（第15図、図版9） S X50の西約2.1mの位置で確認した楕円形の土坑で、この遺



第15図 炉跡S X50・51実測図（1/20）



第16図 環濠 S D39実測図 (1/40)

構も内部に焼土や炭が堆積していたことから、竪穴住居内に設けられた炉跡ではないかと判断した。西部が調査区外にあるため、全容は不明だが、径約0.75m、深さ約0.2mほどの規模に復元でき、底部は平坦な箱形に掘り窪められていた。出土した遺物が皆無であるため、時期はもとより住居の規模なども不明である。

環濠 S D39 (第16図、図版9) 調査区北端の10区で検出した東西方向に延びる素掘りの溝である。調査の時点では、一端を確認したにすぎなかったが、調査終了後の工事に伴う立会調査で全容が明らかになった。幅は、約2.15m、深さ約0.9mほどの規模に復元でき、横断面はV字形に近い状態に掘り窪められていた。埋土は、大きく第1層(橙色土斑入茶褐色土)、第2層(茶褐色土)、第3層(暗茶灰色礫混り土)、第4層(暗橙褐色砂礫)に分けることができ、流水や滞水のあった形跡は認められなかった。そのうち第1・2層からは、壺、甕、高杯など弥生中期後半を中心とする土器片がまとまって出土した他、太型蛤刃石斧や打製石鏃なども出土している。

ところで、この S D39は、約40mほど西側で同時期に行われていた右京第757次調査南調査区⁽¹⁵⁾での溝 S D22に連なることが確認され、その形態や規模、それに溝の南北で確認された遺構の種類が大きく異なる点などを重視して、居住域と墓域とを区切る環濠と判断した。

溝 S D54 1区の西部で確認した東西方向の素掘り溝で、竪穴住居 S H47と重複し、それよりも古いことが判明した。幅0.8~0.9m、深さ約0.1mほどの規模で、横断面は逆台形に掘り窪められている。溝内からは、弥生土器の小片が少量出土している。

土坑 S K57 5区の北東隅部において検出した不整形な土坑である。木の根によって攪乱されていたが、東西0.65m、南北0.75m以上、深さ約0.3mほどの規模があり、弥生中期の壺や甕などがまとまって出土している。

柱穴 調査区内からは、数多くの柱穴を確認しており、特に5～7区にかけて集中する特徴がある。柱穴のほとんどは、径0.2～0.3m前後の楕円形であるが、深さは深浅多様であった。これらの柱穴からは、弥生土器片を出土するものが多く、なかにはP22やP146のように比較的大きな破片が出土したのものもある。多くの柱穴は、十分な検討をしていないが、竪穴住居の支柱穴や掘立柱建物になるものを含んでいる可能性は十分に考えられる。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、陶磁器、軒平瓦、丸・平瓦、金属製品など各種のものがあ、その数量はコンテナに11箱程度ある。北調査区では近世以降のものが主体で、全体的に出土量が乏しいのに対して、南調査区では出土量が比較的多く、それも弥生時代と長岡京期のものが中心であった。以下では、調査区ごとに分けて遺物の説明を行う。

(1) 北調査区の遺物

出土遺物には、弥生土器、長岡京期土師器・須恵器・瓦、平安時代黒色土器・土師器、江戸時代以後の近世・近代土師器・陶磁器・瓦・金属製品などがある(第17図、図版11)。

近世の遺物

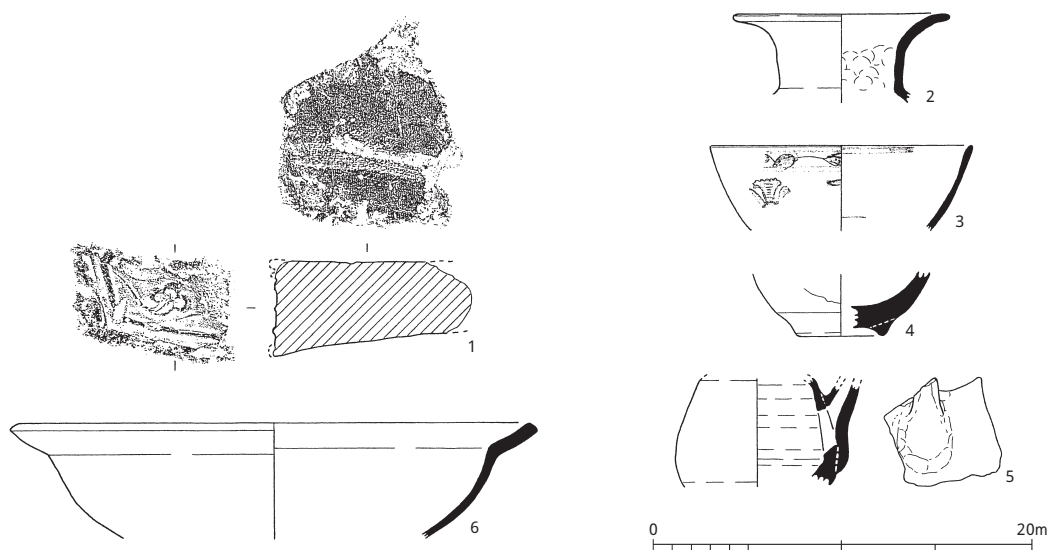
近代遺構出土遺物は、陶磁器が主で、鉄釘などがあつたが、土師器皿はほとんど無かつた。

溝S D01出土遺物には、陶磁器類や土師器鍋などがある。陶器には備前播鉢(13)、水注(5)や壺、瀬戸天目茶椀、唐津椀(4)などがある。大小の瓦器鉢類も少量ある。

この他、溝S D02から、6と同形態の土師器鍋や伊万里碗などの陶磁器類(7～11)が、溝S D06から陶器急須片などが出土している。

平安時代の遺物

平安時代の遺物には、土器類と瓦がある。土器類は、第4層や攪乱坑から、近世・近代遺物に



第17図 北調査区出土遺物実測図(1/4)

混じって出土したもので、黒色土器B類椀(15・16)、土師器皿(24)、緑釉陶器形態の須恵器皿(17)などがある。10世紀代の所産と考えられ、右京第401次調査検出の遺構群の時期のものと考えられる。瓦は、近世堀S D01出土の飛雲文軒平瓦が1点ある(1)。他に凸面縄目タタキで凹面布目の平瓦や丸瓦の小片が少量出土したが、長岡京跡関連遺物か、平安時代の遺跡に関するものか、判別できなかった。

長岡京期の遺物

長岡京期の遺物には、土師器(25~29)や須恵器(18~23)がある。ほとんどは近世堀S D01から出土したもので(18~23・25・26・29)で、第4層(27)や攪乱抗からの出土したものなどもある。

須恵器には杯B(18~21)、杯B蓋(22)などの食膳形態の他、壺G(23)や壺Lなどの壺類、甕などの貯蔵形態もある。

土師器には、皿A b手法(26)、杯B(25)、高杯A a形態(28)、高杯A b形態(29)などの食膳形態や甕、生駒西麓産移動式カマド(27)などの煮沸形態や煮炊具などもある。

弥生時代の遺物

弥生時代の遺物には、土器と石器類(剥片)がある。弥生土器は、溝S D21、溝S D25、溝S D26(2)、溝S D28(31)、落ち込みS X20(30)などから出土した。石器剥片(33)は、柱穴P19から出土した。

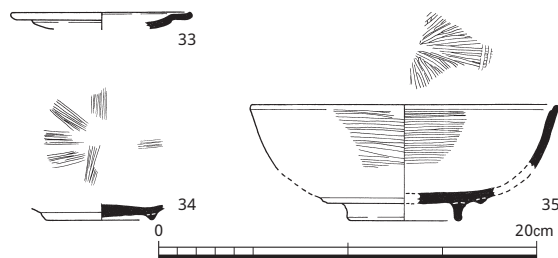
土器は、ほとんどが壺と甕で、高杯など他の形態はほとんど無い。壺には、水平になるまで外反した口縁部をもち、端部を丸くおさめた広口壺(2)がある。甕には、外面をタテハケ調整したものや、外面に平行タタキ目を残すもの(31)がある。これらは中期後葉段階と考えられる。30は、受け口状に屈曲した甕の口縁部で、端部は水平な面をなす。

剥片(32)は、粘板岩製で、長さ3.4cm、幅1.1cm、厚さ0.25cmの小片である。

(2) 南調査区の遺物

平安時代の遺物

カマドS X42、柱穴出土遺物(第18図、図版12) カマドS X42から土師器小皿(33)と黒色土器椀(34)が、柱穴P33からは黒色土器の椀(35)など平安時代中期の遺物が出土している。1は、口縁端部を屈曲させた



「手の字状口縁」の皿で、口径9.6cm、器高0.9cm前後に復元される。2は、低い高台を貼り付けた黒色土器椀の底部片で、内外面を黒色化したB類である。内面見込みのヘラミガキは放射状で、高台径は5.5cmある。3も内外面すべてを黒色化したB類の椀で、口縁端部内面に1条の沈線を巡らしている。口径は16.3cmあり、内外面とも密にヘラミガキ調整して仕上げている。底部には、丸味を帯びて突出する高台の外側に断面三角形の低い凸帯を貼り付けた類例のみられない珍しいもので、ここでは椀の底部に復元した

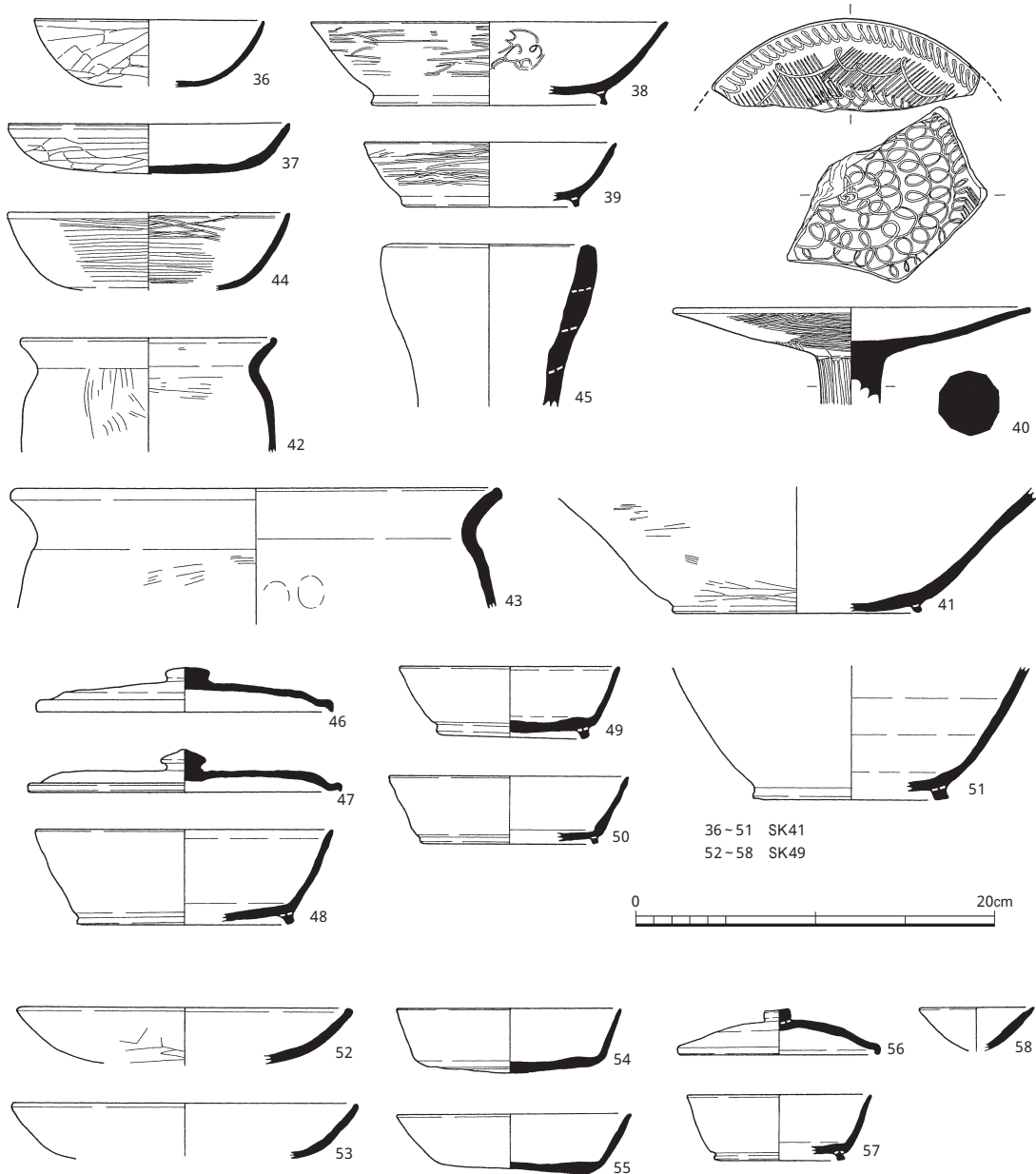
第18図 南調査区出土平安時代の遺物実測図(1/4)

が、蓋などの器種になるのかも知れない。

長岡京期の遺物

土坑 S K 41 出土遺物（第19図、図版12）土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、平瓦などが出土しており、その主要なものを図示した。

土師器には、椀 A・皿 A・杯 B・高杯・盤 B・甕 A などがある。椀 A（36）は、外面全体をヘラケズリする c 手法で調整し、口径13cm、器高は3.7cmほどある。皿 A（37）は、外面のヘラケズリが口縁端部にまで及んでいない。口径15.8cm、器高2.8cmある。杯 B は、口径20cm、器高5.7cmの大型品（38）と口径14.2cm、器高3.6cmの小型品（39）がある。ともに外面をヘラミガキ調整して仕上げ、38の内面には螺旋状の暗文がわずかに認められた。高杯（40）は、口径20cmの小型品で、杯部の外面を密にヘラミガキし、内面は螺旋状と放射状の暗文を丁寧に施して仕上げ



第19図 土坑 S K 41・49出土遺物実測図（1/4）

いる。脚柱状部は細くて、しかも10角に面取りされた珍しいものであり、ヘラミガキを密に施している。焼成は良好で、赤褐色を呈し、口縁部内面には煤の付着が認められる。盤B(41)は、口縁部を欠失し、全体に磨滅しているが、外面にミガキの痕跡がわずかに残っている。底部に貼り付けられた高台は、断面が台形の低いもので、径は11cmある。甕は、口径14.4cmの小型品(42)と口径27.6cmの大型品(43)があり、42の外面には煤が付着していた。

須恵器には、杯B・杯B蓋・鉢D・壺・甕などがある。杯Bは、口径16.6cm、器高5.3cmの大型品(48)と、口径12.4~13.4cm、器高4cm前後の中型品(49・50)がある。48は、底部外面にヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめ、軟質焼成されているため、灰白色を呈する。杯B蓋(46・47)は、ともに扁平な形態で、口縁部を屈曲させている。46は口径16.4cm、器高2.6cmあり、軟質焼成されているため、淡灰白色を呈する。47は硬質に焼成され、口径17.6cm、器高2.4cmある。51は、鉢Dと考えられる底部から体部にかけての破片で、高台径は11cmあり、灰白色を呈する。

黒色土器の杯(44)は、内面と口縁部外面を黒色化するA類である。内外面とも密にヘラミガキを施して調整し、口縁端部内面には浅い沈線を1条巡らせている。口径15.8cm、器高は4.4cm前後に復元される。胎土に赤色粒子を多く含み、淡茶褐色を呈する。

製塩土器は、破片が多く、全形の知れるものはないが、45は口縁部が直線的に開き、口縁端面が平坦になる。胎土に細かい砂粒を多く含み、内外面ともナデを施す。口径は10.8cmある。

土坑SK49出土遺物(第19図、図版12)土師器、須恵器、土製品、平瓦などが出土しているが、SK41に比べると数量はさほど多くない。

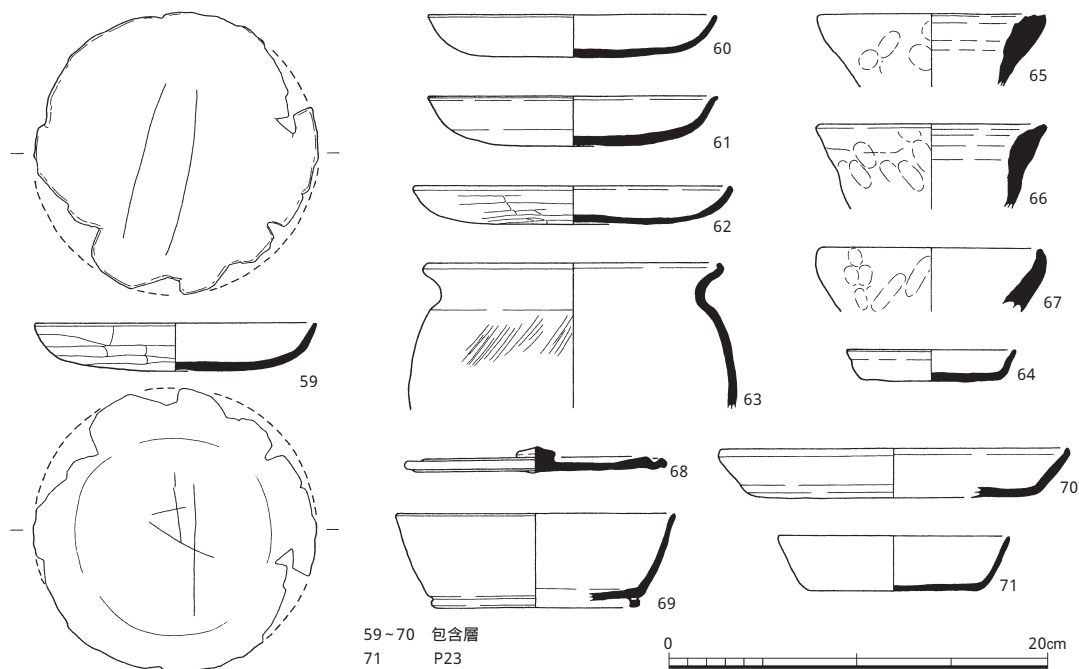
土師器には、皿A・椀A・カマドなどがある。皿A(52・53)は、口径19cm前後、器高3cm前後の大きさで、口縁端部を内側に肥厚させて丸くおさめるもの(52)と尖り気味にするもの(53)がある。全体的に磨滅しているため、外面の調整は不明瞭だが、外面すべてをヘラケズリするc手法ではないかと考えられる。カマドは、図示していないが、角閃石を含んだ暗茶褐色を呈する生駒西麓産のものである。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・甕などの器種がある。杯Aは、口縁部が直立気味に立ち上がるもの(54)と外反するもの(55)がある。ともに軟質に焼成されて淡灰褐色を呈し、底部外面にはヘラ切りの痕跡を明瞭にとどめている。54は口径12.6cm、器高3.7cm、55は口径13.2cm、器高3.5cmある。杯B(57)は、口径10.4cm、器高3.7cmの小型品。杯B蓋(56)は、笠形の形態を呈する口径11.4cm、器高2.6cmの小型品で、つまみは扁平な円形を呈する。

土製品には、ミニチュアカマドと組み合うナベ(58)や土馬などがある。ナベは、傘形を呈するもので、口径は6.5cmある。

包含層、柱穴出土遺物(第20図、図版12)8・9区に堆積していた暗褐色粘質土層から土師器、須恵器、製塩土器などが出土しているほか、柱穴からも須恵器などが出土している。P23から出土した71以外は、すべて包含層から出土したものである。

土師器には、皿A・皿C・甕などがある。皿A(59~62)は、口径14.8~17cm、器高2.1~2.7cmほどの法量で、口縁部のみをヨコナデし、底部不調整のe手法のもの(61)もあるが、外面全



第20図 南調査区包含層、柱穴出土遺物実測図(1/4)

体をヘラケズりするc手法のものが多い。59の内外面には、焼成後に線刻を施している。皿C(64)はe手法で調整し、口径9cm、器高は1.7cmある。甕(63)は口径16cmあり、外面には煤が付着していた。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・壺Lなどがある。杯A(71)は、口径12.4cm、器高3cmで、焼成はやや甘く、灰色を呈する。杯B(69)は、口径14.8cm、器高5cmで、焼成はやや甘く、灰色を呈する。杯B蓋(68)は、器高が低い扁平な形態で、つまみも扁平な宝珠形である。口径14cm、器高1.4cmある。皿A(70)は、口縁端部を上方につまみ上げて内傾する面をもつ。口径18.8cm、器高2.6cmあり、焼成はやや甘く、灰色を呈する。

製塩土器(65~67)は、口縁部の破片が多く、全形の知れるものはないが、口縁部が大きく外方に開くもの(65・66)と内湾気味に開いた口縁部の端部を内側に折り曲げたもの(67)に分けることができる。前者は、口径12cm前後で、緻密な胎土で硬質に焼成され、内面にはナデによる稜線が明瞭に残っていた。後者は、胎土に砂粒を多く含み、口径は11.6cmある。

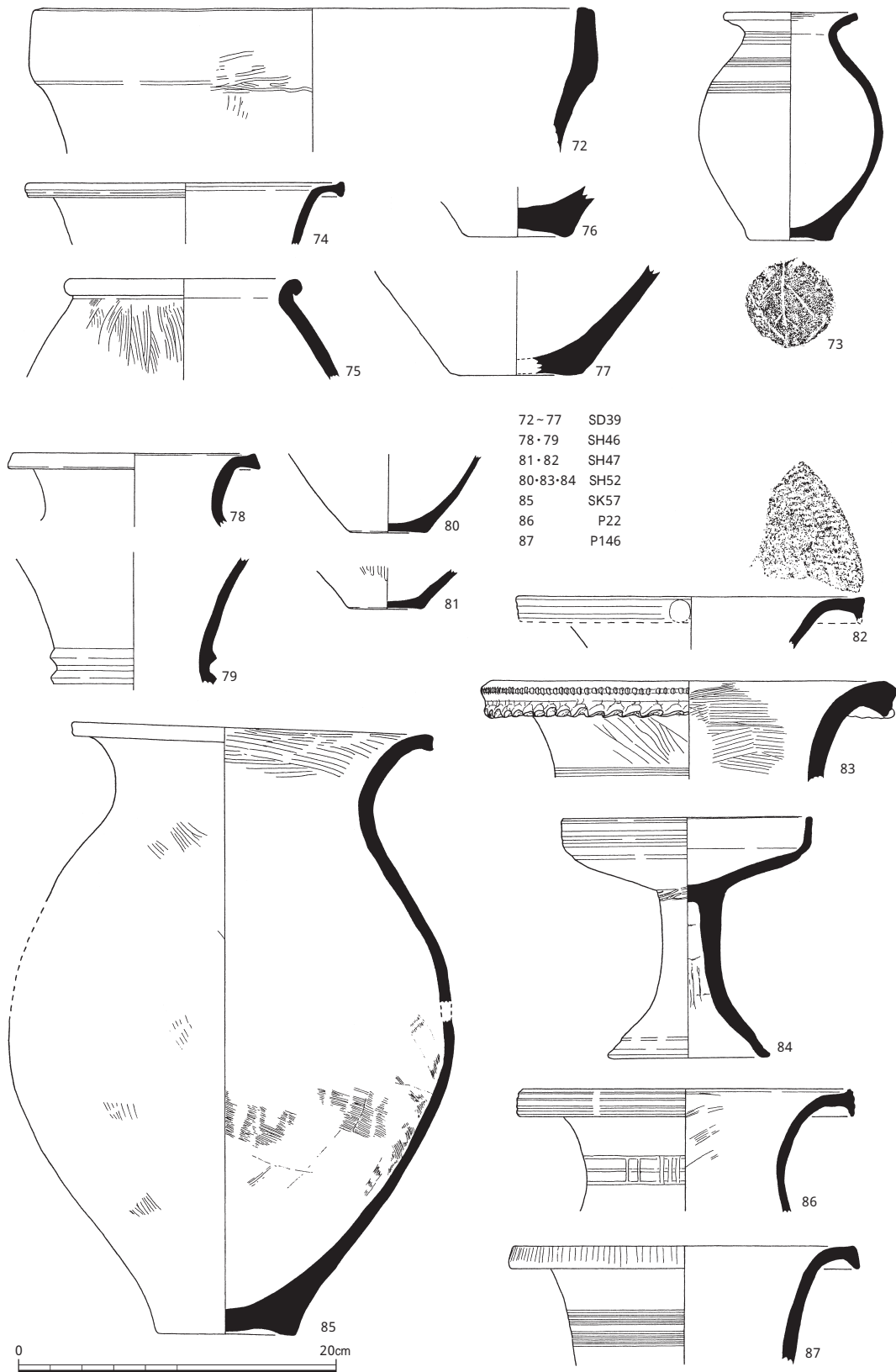
小結 以上、図示した遺物を中心に説明してきたが、統計処理や十分な検討を加えることはできていない。ただ、出土量を総体的にみると、須恵器に比べ土師器の比率が高いことは確実であり、長岡京内の一般的な出土傾向に共通しているといえよう。

弥生時代の遺物

この時期の遺物は、弥生土器と各種の石器があり、その大半が竪穴住居や環濠など遺構から出土している。しかしながら、弥生土器の大半は破片で、全形をうかがい知れるものが少ないことはもとより、全体的に器壁の磨滅しているものが多く、施文や調整痕が不明瞭であった。以下では、弥生土器を遺構ごとにわけて説明し、石器についてはまとめて記述することにした。

環濠S D 39出土土器(第21図、図版13) 壺、甕、高杯などがある。72は、受け口状に大きく

環濠SD39



第21図 南調査区出土弥生土器実測図(1/4)

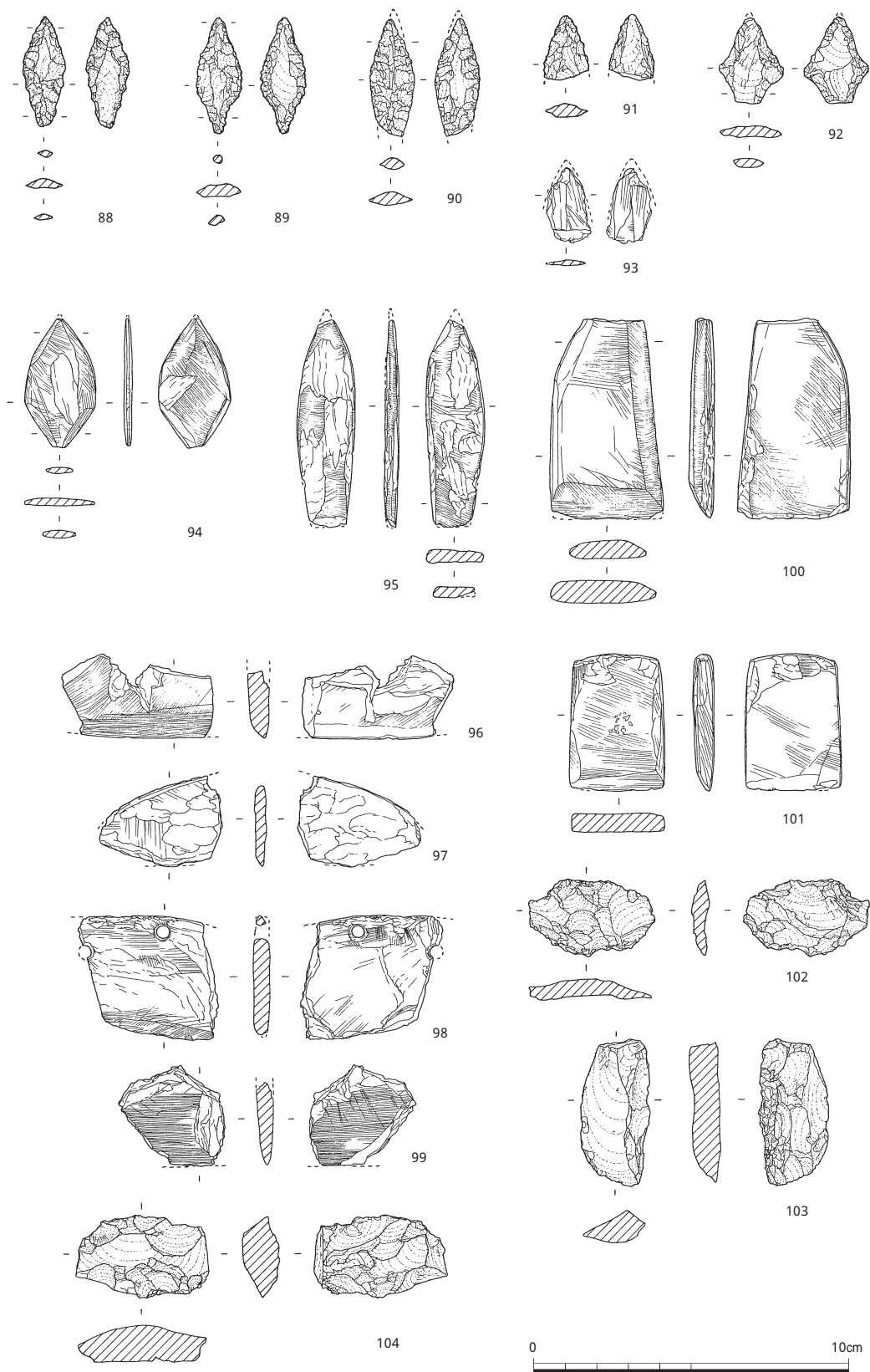
開いた有段口縁をもつ広口壺で、口縁部は直立し、口径35.6cmある大型品である。73は、口径8.5cm、器高14.3cmの小型壺で、頸部から体部上半にかけて櫛描直線文を3帯施している。上げ底気味の底部には、木の葉の圧痕が残る。74は、口径20.1cmほどある広口壺で、口縁端部を上下に拡張させ、擬凹線文を施す。75は、無頸壺の口縁部片で、端部を折り曲げて丸く肥厚させている。内面はナデ、外面は粗いハケメを施して調整し、口径は15.1cmある。76・77は、壺もしくは甕の底部片で、76は底径6.2cm、77は8.4cmである。

竪穴住居 S H46・47・52出土土器（第21図、図版13）78・79は S H46、81・82は S H47、80・83・84は S H52から出土したものである。78は無文の広口壺の口縁部片で、口径15.5cmある。79は、頸部に断面三角形の凸帯を貼り付けた壺片である。82は、口縁部が水平に近く開く広口壺である。口縁端部を上下に拡張させたもので、凹線文を巡らし、円形浮文の剥がれた痕跡をとどめている。また、口縁部内面には扇形文を施し、口径は22cmある。83は厚手の広口壺で、口縁端部には刻目文を施し、頸部には櫛描直線文を巡らせる。口縁部内面には、粗い単位のハケメを横方向に施し、外面はヘラミガキ調整している。口径は26.4cmである。高杯（84）は、口縁部が直立する形態の杯部をもち、細長い脚柱状部からなだらかに広がる裾部には段が認められる。口縁部には浅い凹線文を施し、杯部と脚柱状部との境に3条の沈線を巡らせている。口径16cm、器高は15.2cmある。80・81は壺または甕の底部片で、ともに器壁が比較的薄く、80は底径4.8cm、81は5cmである。この他、図示していないが、S H47から出土した有段口縁の壺の頸部にヘラ状圧痕凸帯文を施したものがあ

る。土坑 S K57、柱穴出土土器（第21図、図版13）85は、土坑 S K57から出土した広口壺で、口径22.7cm、器高38.9cmに復元できる。全体に磨滅しており、調整は不明瞭だが、内面は口縁部に目の粗いハケメ、体部には細かいハケメの痕跡が認められた。底部は厚く、上げ底気味である。86は、P22から出土した口径が20.8cmある広口壺で、上下に拡張させた口縁端部に細かい凹線文、頸部には半裁竹管文を施している。87は、P146から出土した口径22.2cmある広口壺で、口縁端部に縦線文、頸部に櫛描直線文を2帯以上巡らせている。

石器（第22・23図、図版14）石器には、石鏃、石包丁、石斧、それにサヌカイト製の剥片などがある。

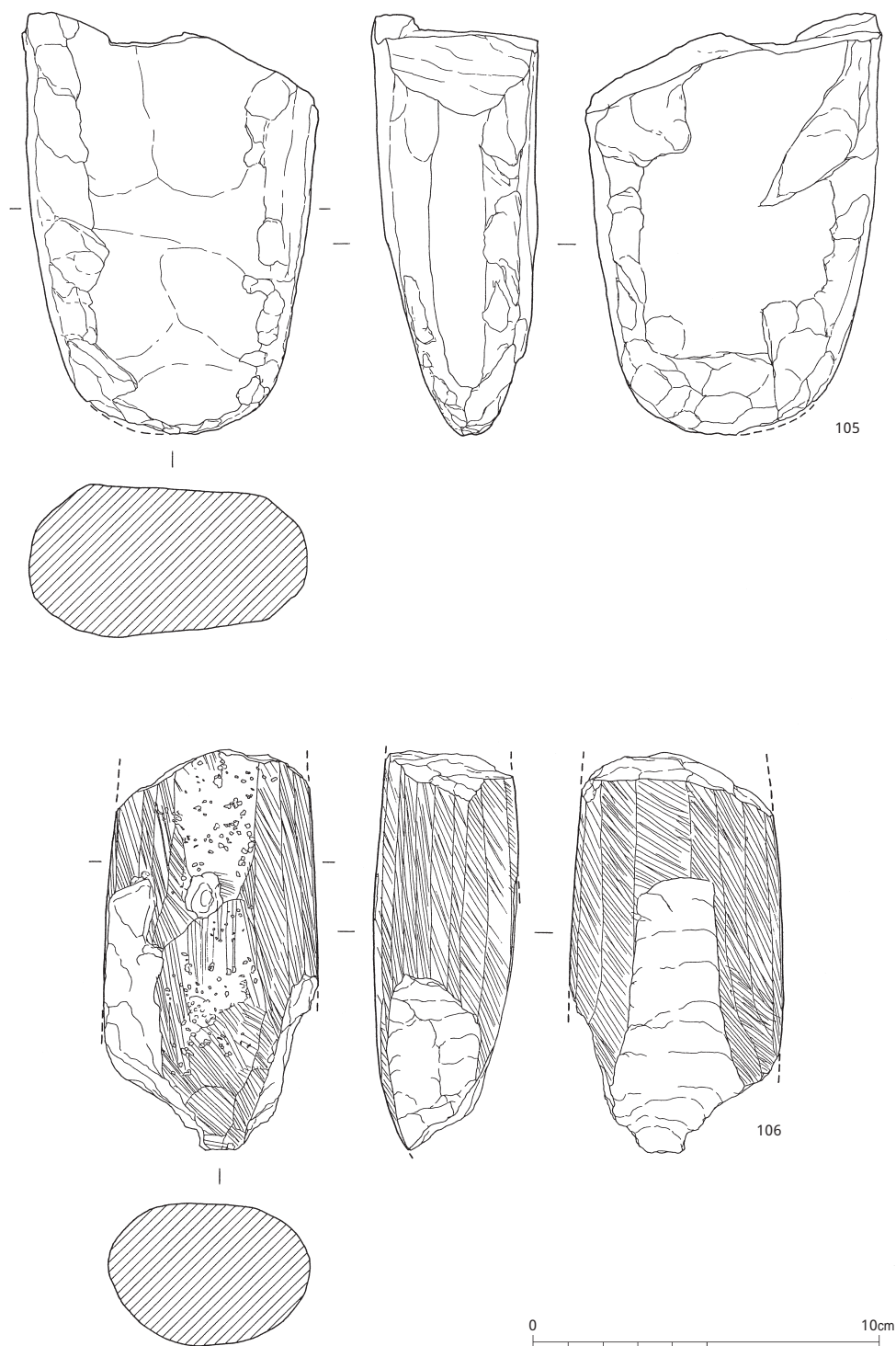
石鏃には、打製と磨製の二者ある。打製石鏃（88～92）は、凸基式（88～90）と有茎式（92）とに分けられるが、すべてサヌカイト製であった。88は、長さ3.5cm、最大幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.3gある完形品で、S H47から出土した。89も、長さ3.7cm、最大幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.3gある完形品で、先端部付近に回転によるとみられる擦痕が見られることから、錐として転用された可能性が考えられる。S H47から出土した。90は先端と基部の一部を欠失する。現存長3.7cm、最大幅1.4cm、厚さ0.5cmある。S H46出土。91は先端部の破片で、S D39出土。92は基部の先端を欠失する。現存長2.7cm、最大幅2cm、厚さ0.3cmあり、長岡京期の土坑 S K41に混在していた。93は、磨製石鏃の先端部と考えられるもので、両面とも明瞭な鑄が認められる。粘板岩製で、S H48から出土した。94は、凸基式磨製石鏃の完形品で、長さ4.1cm、最大幅2.3cm、



第22図 南調査区出土石器実測図 - 1 (1/2)

厚さ0.3cm、重さは約3.5gある。明瞭な鑄はなく、扁平に作られている。石材は粘板岩製で、S H52から出土した。95は、磨製石鏃の未製品と考えられるもので、長さ6.6cm、最大幅1.9cm、厚さ0.5cmある。粘板岩製で、8区の包含層から出土した。

石包丁(96~99)はすべて破損品で、石材は粘板岩製であった。96は直線的な刃部をもつ破損品で、丁寧に研磨して仕上げている。S H47から出土した。97は、表裏面が剥離しているが、形態から石包丁と判断したものである。98は、紐孔部が残る破損品で、両面から穿たれた孔内には



第23図 南調査区出土石器実測図 - 2 (1/2)

紐ズレによるとみられる磨滅の痕跡が認められる。刃部はやや内湾気味で、幅3.9cm、厚さ0.5cmある。上げ土から出土したもので、出土地点は明確にできなかった。

石斧には、扁平片刃石斧(100・101)と大型蛤刃石斧(105・106)とがあり、前者は完形品、後者は破損品であった。100は、石包丁の約半分を再加工して扁平片刃石斧に転用したものである。側面には、石包丁の刃部がそのまま残るが、刃を研磨によってつぶしている。長さ7.4cm、最大幅4.5cm、厚さ0.8cm、重さ30.1gで、石材は粘板岩製である。SH47出土。101は、長さ4.4cm、最大幅3cm、厚さ0.6cm、重さ18gの扁平片刃石斧の完形品で、弧状を呈する基部には敲打による傷跡が認められる。石材は粘板岩製で、SH47から出土した。105は、基部を欠失する大型蛤刃石斧の未製品である。研磨の痕跡は平面にのみ認められ、側面は全く研磨されておらず、未調整のままであった。現存長12.1cm、幅8.5cm、厚さ4.8cmで、石材は玢岩ではないかと考えられる。SH47から出土した。106は、刃部と基部を欠失する大型蛤刃石斧の破損品である。丁寧に研磨されており、研磨によってつけられた幾筋もの稜線が縦方向に明瞭に残っている。現存長11.6cm、最大幅6.2cm、厚さ4.2cmで、石材は玢岩ではないかと考えられる。SD39出土。

サヌカイト製の剝片(102~104)は、いずれもSH47から出土したもので、比較的大きさや形態が類似している。

小結 以上、出土した弥生土器の一部しか図示していないが、形態や施文などの特徴を考慮すると、83のように 様式のものを含んでいるとはいえ、有段口縁の壺や凹線文が認められることなどから、 様式の新相から 様式にかけてのものが主体であるといえる。また、数量は必ずしも多いとはいえないが、石鏃、石包丁、石斧など各種の石器類も出土しており、その中には未製品と考えられるものも含まれていた。神足遺跡のこれまでの調査では、膨大な数量の石器類が出土しており、まさに大規模な石器の生産と消費の双方を兼ね備えた集落であったということができよう。

5 まとめ

(1) 近世勝龍寺城跡

当調査では、近世勝龍寺城の北東部に関する成果があった。まず取り上げなければならないのは、北調査区では堀SD01の検出成果である。また、南調査区の調査終了後に、工事掘削に際して、本丸を囲む内堀の位置を確認できたことも、大きな成果といえる。

今回検出した遺構群を、周辺部での調査成果と合わせて、「永井直清公御在所城州神足之図」の北東部に重ね合わせて見たものが第24図である。この図から、検出遺構の項でも述べたように、北調査区で検出した堀SD01は、北東部の「L」字形屈曲部と考えられる。報告書第26集で想定していた位置より、西に約14m、南に約24mの位置であった。今回の成果から得られた絵図との比較検討結果が正しければ、右京第465次調査⁽¹⁶⁾検出の堀は、「永井直清公御在所城州神足之図」にある北辺堀とは別に考えた方がよいのかも知れない。また、南調査区の北延長上で確認した東西方向の堀は、右京第494次調査と右京第290次調査の東延長上にあたり、本丸を囲む北辺の内堀と

考えられる。報告書第26集での想定では、北東隅部分にかかるはずであったが、今回東西方向にあることが確認できたため、本丸東辺堀の位置を少なくとも約10mほど東に移動させて復元する必要が生じた。

以上のように、部分的な修正を余儀なくされたが、「永井直清公御在所城州神足之図」を基にした基本的配置は、変わらないものと思われる。さらに周辺部の調査が進めば、絵図を基にしてより事実に近い復元が可能になるものと思われる。

(2) 長岡京期

今回の調査区を長岡京の条坊復元図に当てはめてみると、北調査区が右京六条一坊二町の中央北寄り、南調査区は右京六条一坊三町の中央西寄りの地点に位置していることになる(第25図)。二・三町とも長岡京のメインストリートである朱雀大路に面していることから、敷地の東部は大路の路面によって大きく削減され、東西幅はかなり狭くなっていることが知られる。

さて、今回の北調査区では、この時期の遺物は出土したものの、明確な遺構を確認できなかったが、南調査区では土坑と柱穴などの遺構を検出することができ、遺物もまとまって出土した。これまでの調査は、二町域では北西部を中心に行われており、右京第524次調査で掘立柱建物と柵列、右京第757次調査で井戸・溝・柱穴などが確認されている。また、三町域では西辺部に限られるが、右京第279次調査で掘立柱建物や溝が、また右京第757次調査で柱穴などが確認されており、両町とも宅地として利用されていることは確実であろう。そして、遺構の密度が全体的に粗雑であることや、掘立柱建物の多くが2間×3間程度の小型なものばかりであることなどを重視すると、二・三町はともに小規模な宅地として利用されていると推察することができる。ただし、宅地を区切る施設などが未確認である現状においては、その可能性を指摘するにとどめ、今後周辺地域でのさらなる調査をまって判断することにしたい。

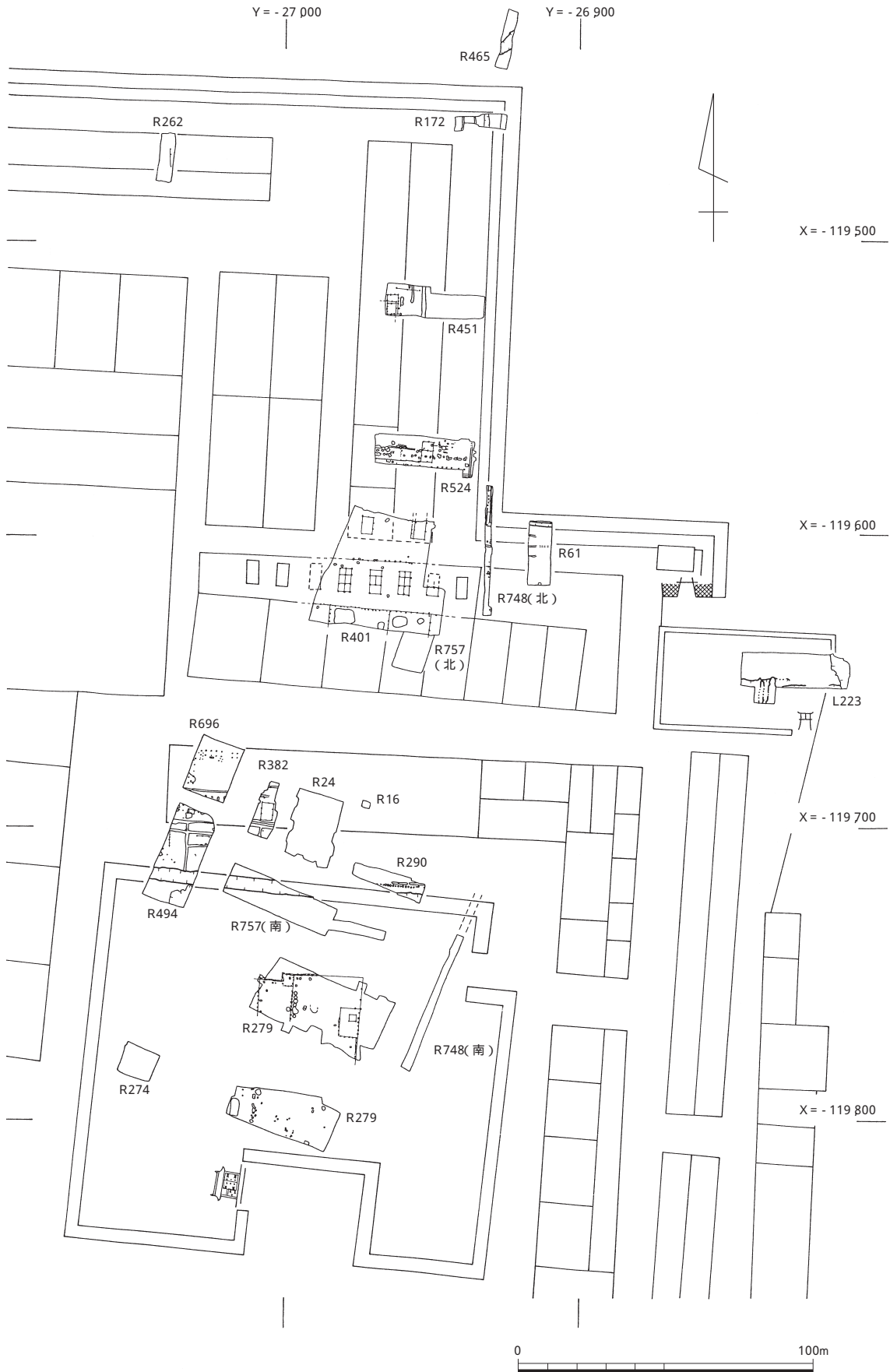
(3) 弥生時代の神足遺跡

弥生時代の神足遺跡は、これまでの調査で居住域と墓域の双方が広範囲にわたって確認され、桂川右岸域における弥生時代中期を中心とする拠点的な大集落であることが判明している。居住域は、東西に並んだA・Bの2個所に分けられ、その周囲に方形周溝墓群を主体とする墓域が取り巻く集落構造になることが復元されており、その範囲は東西約500m、南北約700mにも及ぶ広大なものになることが推察される。今回の北調査区は居住域Aの北側に広がる墓域に、そして南調査区は居住域A内にそれぞれ想定されており、両調査区でこの時代に関係する成果が得られた(第26図)。

まず北調査区では、中期の方形周溝墓の周溝と考えられる溝や土坑などを確認できたが、調査範囲の狭いことや後世に攪乱を受けていたこともあって、その実態は不詳な点が多い。ただし、これまでの調査によれば、墓域の北限に近い地域であることは確かなようである。一方、南調査区においても、狭長な範囲での調査であったが、竪穴住居や炉跡、土坑、溝、柱穴など中期を中心とする遺構が数多く確認され、右京第279次調査地の東側にも居住域が連綿と続いていることが明らかになった。検出された竪穴住居は、すべて円形の住居であること、その中に火災を受け

たとみられる焼失住居のあること、時期も ・ 様式を中心とすることなど、右京第279次調査での様相と類似しており、住居の集密度が極めて高いことを改めて認識できた。さらに注目すべき成果としては、環濠と考えられる東西溝S D39を確認できたことであろう。この溝は、わずか3 m分しか検出していないが、同時期に調査が進行中だった右京第757次調査で確認された東西溝S D22と一連の遺構になることが判明し、両者を比較検討することによって環濠と判断したものである。環濠は、これまで数多くの調査がなされていながら、未確認ただけに特筆すべきことで、桂川右岸域の弥生集落では前期の雲宮遺跡、後期の長法寺遺跡に次いで3例目の発見となった。この環濠の発見によって、居住域Aの北限が確認されたことになり、今後それがどのように巡って行くのかを追究する必要がある。

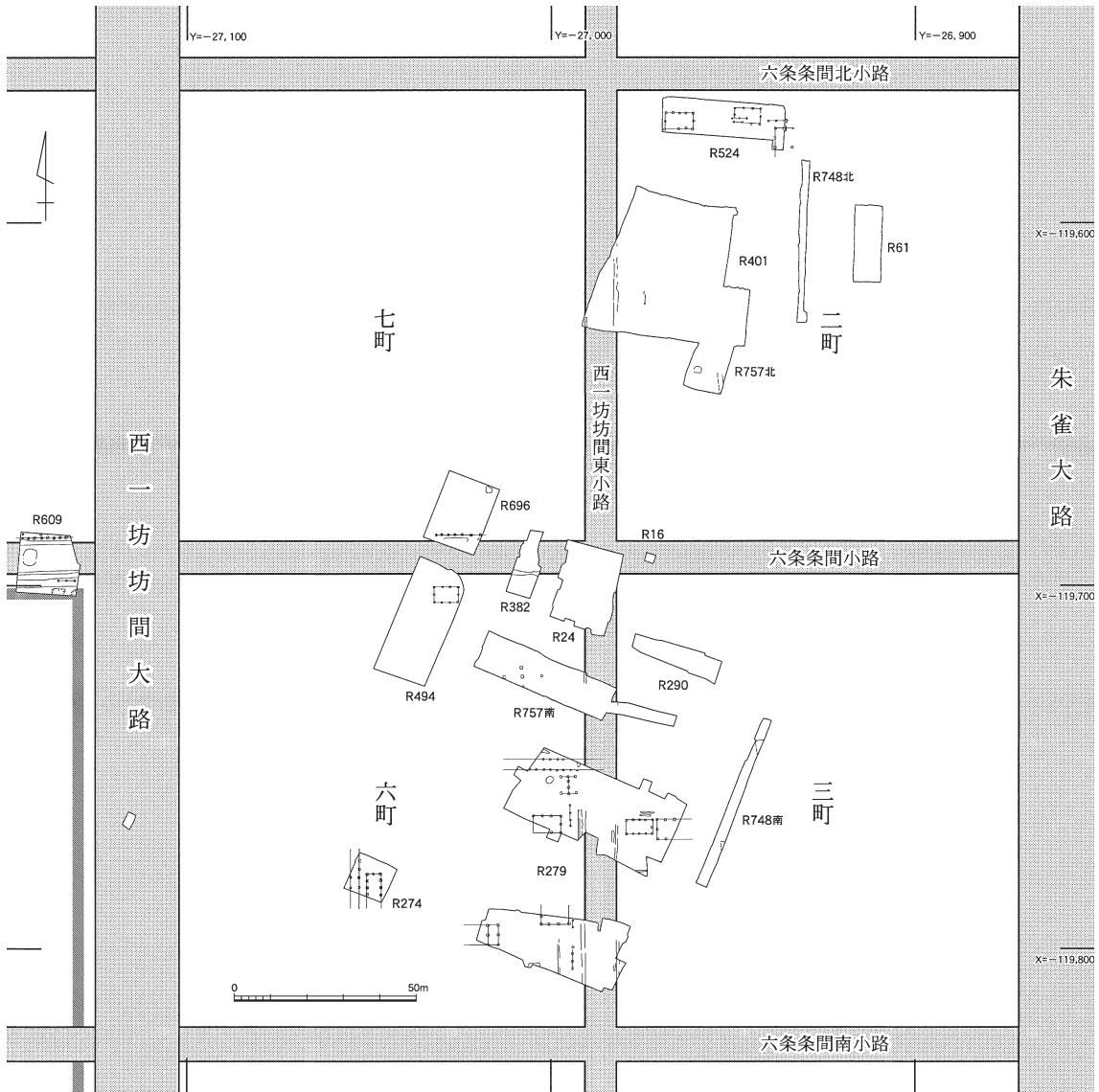
- 注1) 岩崎 誠「長岡京跡右京第16・24次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年
 2) 戸原和人「長岡京跡右京第61次調査概要」『長岡京市報告書』第14冊 1985年
 3) 岩崎 誠「右京第279次調査報告」『長岡京市センター報告書』第4集 1989年
 4) 原 秀樹「右京第290次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和62年度 1989年
 5) 原 秀樹「右京第382次調査概報」『長岡京市センター年報』平成3年度 1993年
 6) 岩崎 誠「右京第401次調査略報」『長岡京市センター年報』平成4年度 1994年
 7) 中島皆夫「右京第494次調査概報」『長岡京市センター年報』平成7年度 1997年
 8) 山本輝雄「長岡京跡右京第524次調査概要」『長岡京市センター報告書』第13集 1999年
 9) 木村泰彦「長岡京跡右京第696次発掘調査報告」『長岡京市センター報告書』第22集 2001年
 10) 木村泰彦「左京第223次調査略報」『長岡京市センター年報』平成元年度 1991年
 11) 注2に同じ
 12) 木村泰彦・山本輝雄・岩崎 誠『長岡京市センター報告書』第26集 2002年
 13) 注8に同じ
 14) 注12に同じ
 15) 『長岡京跡右京第757次調査現地説明会資料』 2003年
 16) 中島皆夫「右京第465次調査概報」『長岡京市センター年報』平成6年度 1996年



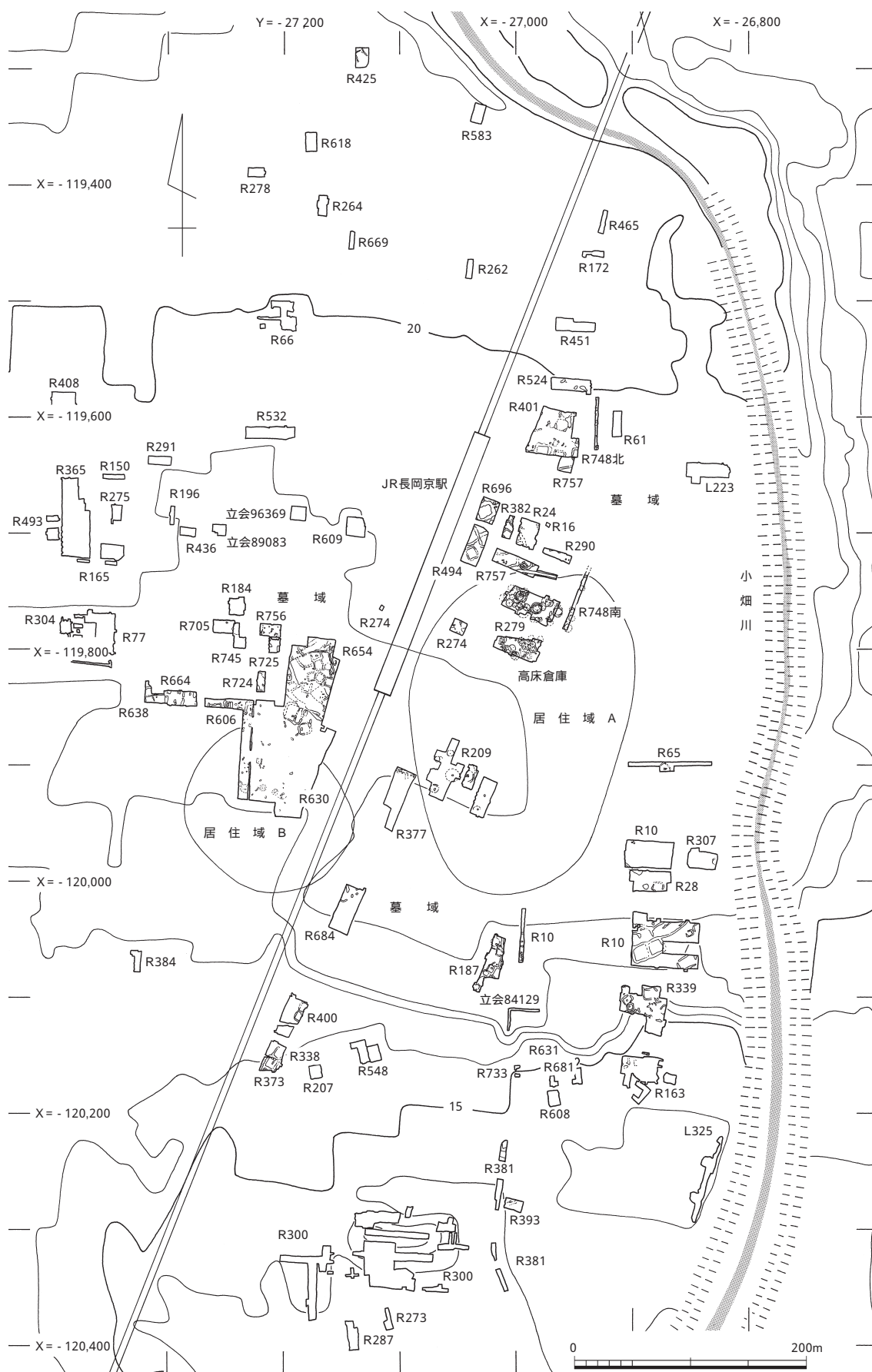
第24図 「永井直清公御在所城州神足之図」と近世の遺構配置図 (1/2,000)

付表1 「永井直清公御在所城州神足之図」推定範囲内の遺構検出状況

調査次数	神足之図 推定位置	検 出 遺 構							調 査 成 果 特 徴 ・ 備 考	文 献	調査面積 (㎡)
		掘立柱建物	柵	井戸	溝	土坑	堀	畑作痕			
右京 10	畑					12		有り	遺構少ない。元墓地か？	市報告書第10冊	3,385
16	無記名宅地								攪乱のため詳細不明	市報告書第14冊	9
24	無記名宅地								攪乱のため詳細不明	市報告書第14冊	20
28	畑								遺構なし	市報告書第10冊	238
61	土塁・外堀				3		1		外堀か？	市報告書第14冊	200
65	足軽・武家屋敷								細長い調査区で、遺構未検出	市報告書第8冊	272
172	御足軽町 外堀				3				土塁裾溝もあるか？ 堀推定位置未調査	センター年報昭和59年度	80
187	御足軽町 外堀	2			1			3	足軽宅地から東西棟2棟 南辺外堀	センター年報昭和60年度	500
209	武家屋敷		9	3		5			三嶋、箕浦、村岡屋敷か？	センター年報昭和60年度	1,400
262	御足軽町	1							南北棟か？	センター年報昭和62年度	84
274	本丸内					3			詳細不明	センター年報昭和62年度	135
279	本丸内	1	10	2		32		有り	本丸内区画柵	センター報告書第4集	1,463
290	本丸北辺堀		1				1		北辺内堀の北辺に平行する柵	センター年報昭和62年度	138
307	武家屋敷・卯道				1	1			詳細不明	センター年報昭和63年度	367
339	畑・藪						1		細川勝龍寺城北辺空堀を利用 して、南辺堀としたか？	センター年報平成元年度	983
377	武家屋敷		3	1	3				小泉屋敷区画施設か？	センター年報平成3年度	679
382	無記名宅地	1			5				無記名宅地区画から建物検出	センター年報平成3年度	112
401	御足軽町 御旗巻人 御旗指八人 武家屋敷	1 1 8 8	1 2				1 18		南北棟、西庇または柵 南北棟 2期有り。後期6m等間で同規模 南北棟5棟配置 大僧、武山、多田、葛岡屋敷 の4区画か？	センター年報平成4年度	1,382
451	御足軽町 土塁	2			2	1			建物は2時期	センター年報平成5年度	310
494	無記名宅地 本丸北辺堀	1	2	1	7		1		建物は、1間×1間の東西棟 梁幅5m、深さ1.5m	センター年報平成7年度	476
524	御足軽町	1		1	2				足軽町に南北棟	センター年報平成8年度	339
532	京口		2		1	2			出入り口施設か？	センター年報平成8年度	416
606	茶屋口							有り		センター報告書第14・26集	935
609	武家屋敷		4						高津、長田屋敷境か？	センター年報平成10年度	260
630	御足軽町 武家屋敷 茶屋口	2 2 2	1 1		2		1		南北棟長屋 宅地区画の柵 高麗門	センター報告書第26集	5330
654	御足軽町 武家屋敷	2		1	4		3		南北棟長屋 宅地区画柵	センター報告書第26集	2225
669	足軽宅地		1						柱穴群。建物の可能性有り。	センター年報平成11年度	50
684	御足軽町			1					石組み井戸か？	センター年報平成12年度	1100
696	無記名宅地		6						2列に平行する柵群。 内、2列は布堀り。	センター報告書第22集	320
748	外堀・土塁 内堀				2		1			センター報告書第31集	138
							1			センター報告書第31集	153
左京 223	神社				2				若宮神社東辺か？	センター年報平成元年度	462
合 計		27	56	10	43	82	8			合 計 (㎡)	23,958



第25図 長岡京の条坊と遺構配置図 (1/2000)



第26図 神足遺跡の弥生時代遺構配置図 (1/5,000)

付表2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい748じはくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第748次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第31集
編著者名	山本輝雄・岩崎 誠
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10 - 1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 (右京第748次北調査区)	ながおかきょうしこうたり 長岡京市神足 二丁目地内	26209	107	34° 55 17	135 °42 19	20021001 、 20021023	138m ²	道路拡幅 工事
こうたりいせき 神足遺跡			83					
きんせいしやうりゆうじじょうあと 近世勝龍寺城跡			84 - 2					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡	都城	長岡京期		土師器、須恵器	近世勝龍寺城の外堀と 思われる遺構を検出			
神足遺跡	集落	弥生時代	溝	弥生土器、石器剥片類				
近世勝龍寺城跡	城館	江戸時代	堀	陶磁器				

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 (右京第748次南調査区)	ながおかきょうしこうたり 長岡京市神足 二丁目地内	26209	107	34° 55 12	135 °42 18	20021125 、 20030117	153m ²	道路拡幅 工事
こうたりいせき 神足遺跡			83					
きんせいしやうりゆうじじょうあと 近世勝龍寺城跡			84 - 2					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡	都城	長岡京期	土坑、柱穴	土師器、須恵器、黒色 土器、製塩土器、瓦	神足遺跡の環濠を初め て検出			
神足遺跡	集落	弥生時代 平安時代	竪穴住居、炉跡、 環濠、土坑、柱穴 カマド、柱穴	弥生土器、石器 土師器、黒色土器				
近世勝龍寺城跡	城館	江戸時代						

圖 版



北調査区江戸時代遺構全景（南から）

長岡京跡右京第748次調査（北調査区）

図版二



北調査区下層遺構全景（南から）



堀 SD01全景（北から）

長岡京跡右京第748次調査（北調査区）

図版四



(1) 北調査区江戸時代の遺構全景（南から）



(2) 堀SD01屈曲部畦断面（南東から）



(1) 堀SD01中央畦断面（南から）



(2) 堀SD01北畦断面（南から）

長岡京跡右京第748次調査（南調査区）

図版六



(1) 南調査区全景（北から）



(2) 南調査区全景（南から）



(1) 竪穴住居 SH47・SH52（東から）



(2) 竪穴住居 SH46・柱穴群（南東から）

長岡京跡右京第748次調査（南調査区）

図版八



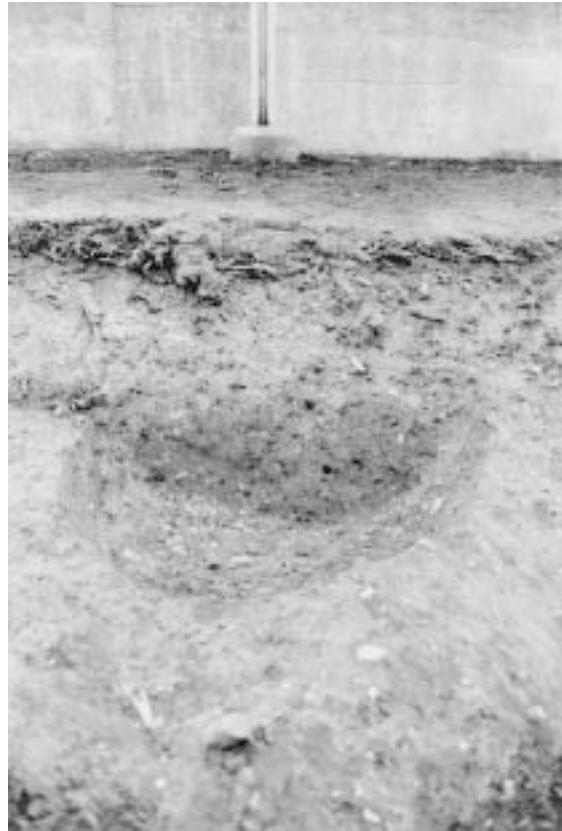
(1) 竪穴住居 SH47 (北から)



(2) 竪穴住居 SH46 (南東から)



(1) 炉跡 SX 50 (北から)



(2) 炉跡 SX 51 (南東から)



(3) 環濠 SD 39 (南西から)

長岡京跡右京第748次調査（南調査区）

図版
一〇



(1) 土坑SK41（南西から）



(2) カマドSX42（南から）



(3) カマドSX42の断面（北から）

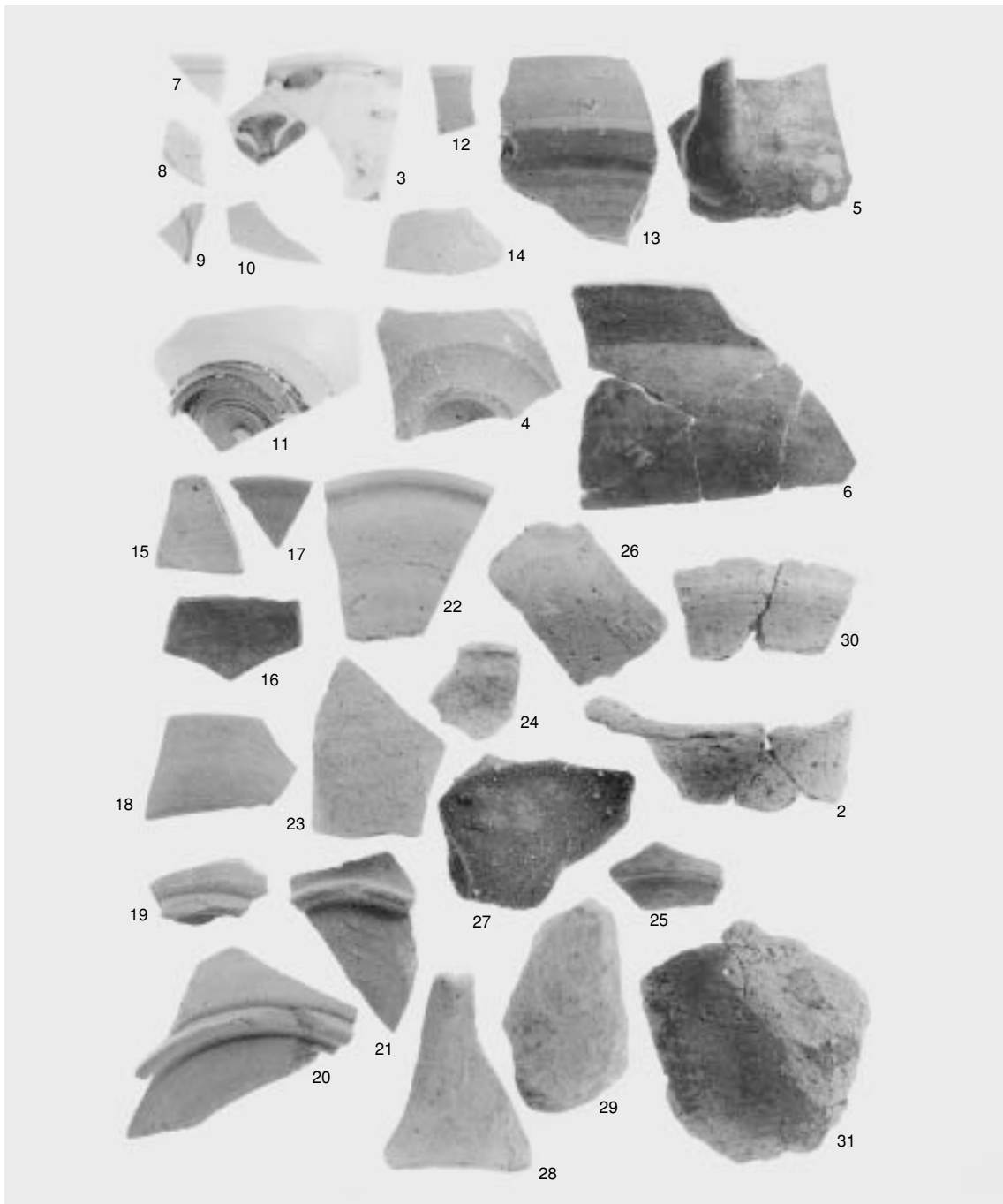
長岡京跡右京第748次調査（北調査区）



(1) 堀SD01出土飛雲文軒平瓦



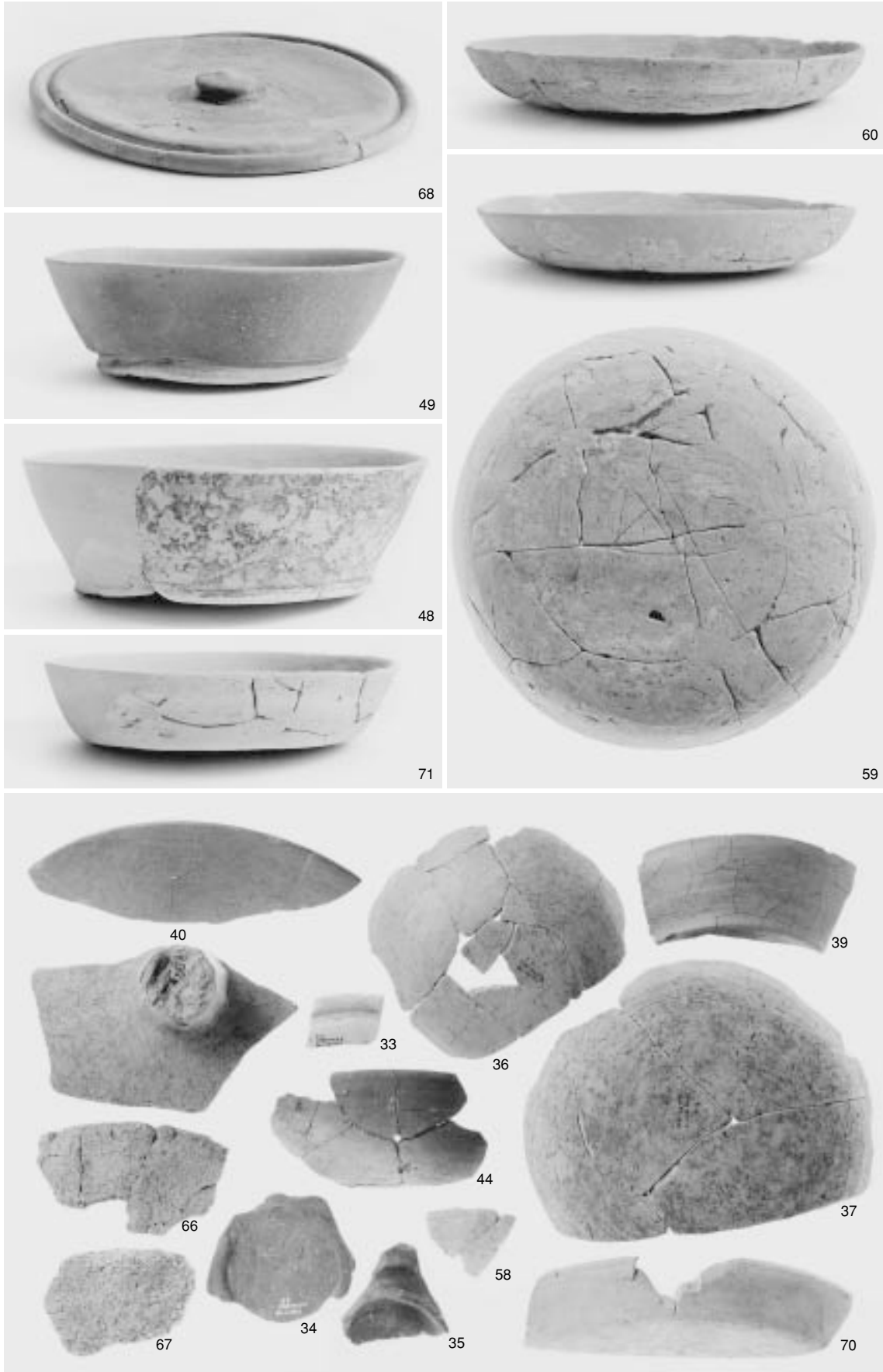
(2) 柱穴P19出土粘板岩剥片



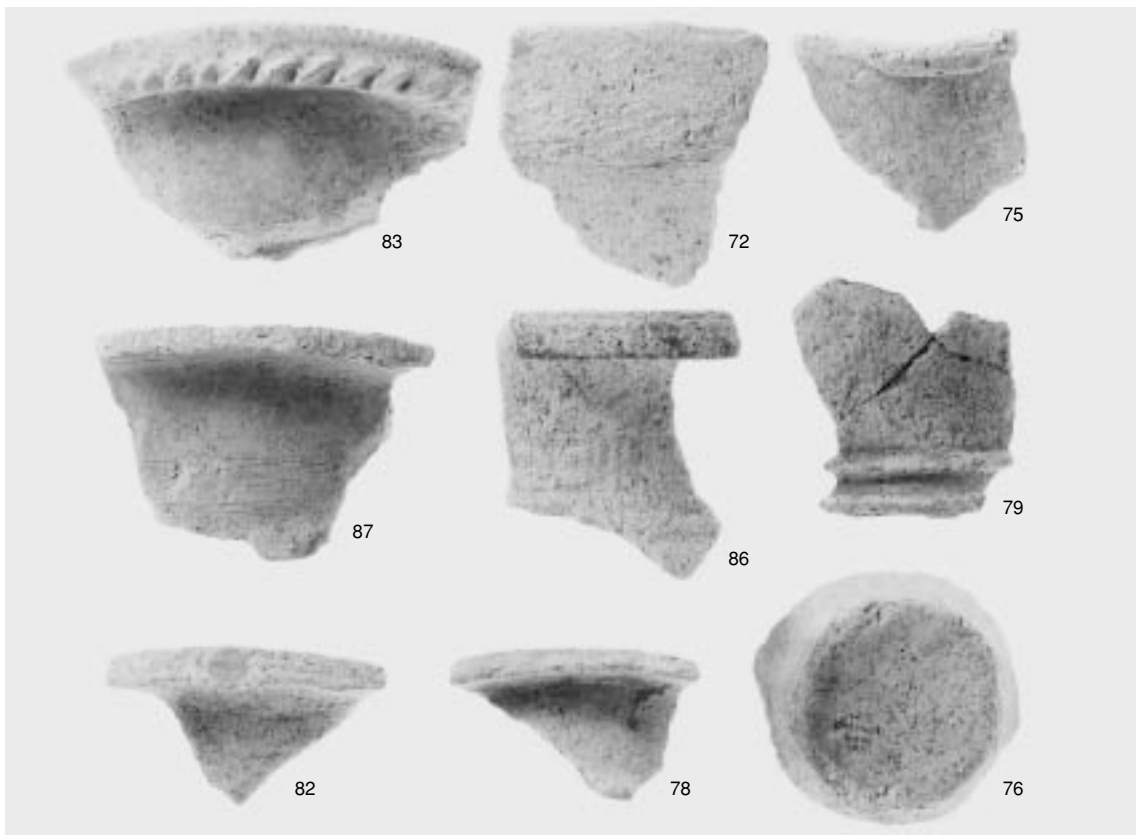
(3) 北調査区出土土器類

長岡京跡右京第748次調査（南調査区）

図版十二



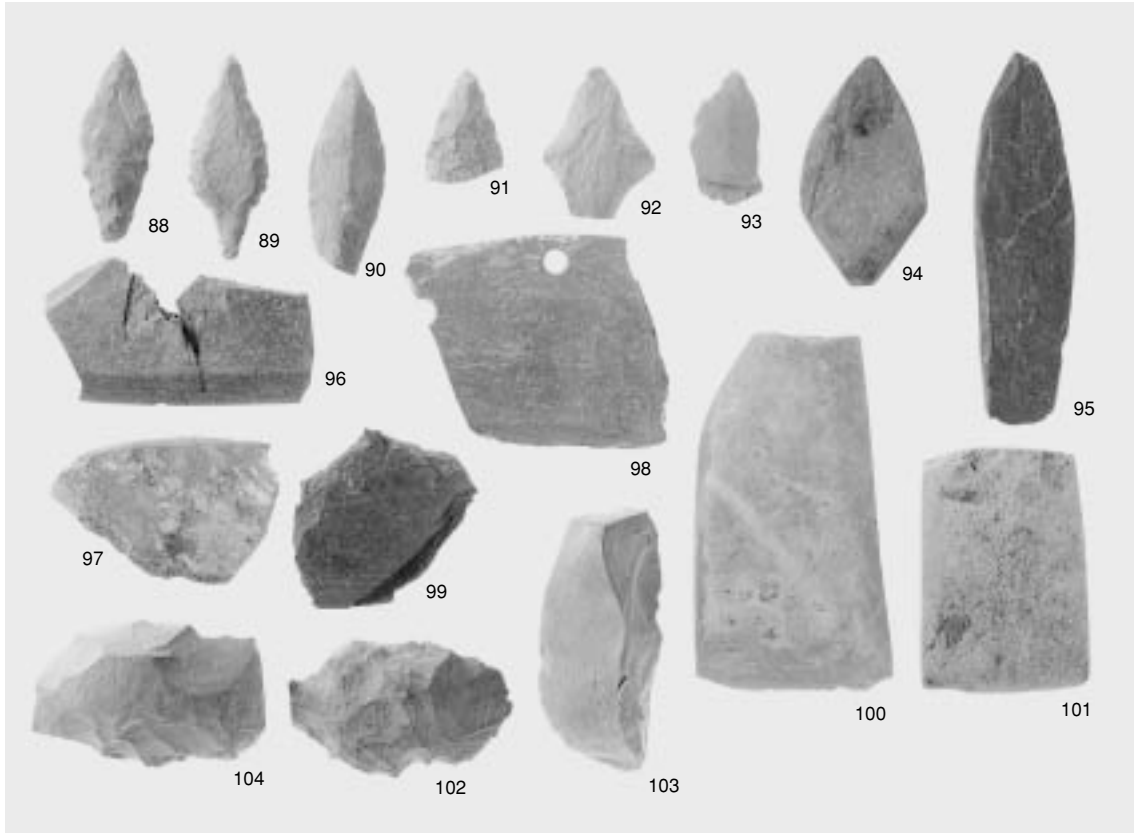
南調査区出土平安・長岡京期の遺物



南調査区出土弥生土器

長岡京跡右京第748次調査（南調査区）

図版十四



106



105

南調査区出土石器

長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第31集

平成15(2003)年3月27日 印刷

平成15(2003)年3月31日 発行

編集発行 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒617 - 0853

京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075 - 955 - 3622

FAX 075 - 951 - 0427

印刷 株式会社 きょうせい 関西支社

〒530 - 8688

大阪市北区天満2丁目7番17号

電話 06 - 6352 - 2271(代)

FAX 06 - 6355 - 2860